

湖東焼窯跡測量調査報告書

1990
彦根城博物館

湖東焼窯跡測量調査報告書

1990
彦根城博物館

例　　言

1. 本書は佐和山山麓に所在する湖東焼窯場跡の測量調査の成果を収めたものである。
2. 本調査は彦根城博物館が実施した。
3. 現地測量および整理・報告書の作成は、当館学芸員谷口徹が担当した。
4. 測量調査には、武立信明・川崎浩一の諸君が参加した。
5. 測量調査にあたっては、当該土地所有者の協力を得た。また、窯場資料「染付彦根名所図大皿」と「御陶器場所地面并諸御建前御絵図」の掲載については、資料所有者の快諾を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 本書の執筆・製図等は谷口が行なった。

目 次

例 言

I 章. 湖東焼の歴史	1
II 章. 窯場を描いた資料	5
III 章. 測量調査の成果	13
IV 章. 採集遺物	16
V 章. おわりに	20

図版 (PL 1 ~ PL24)

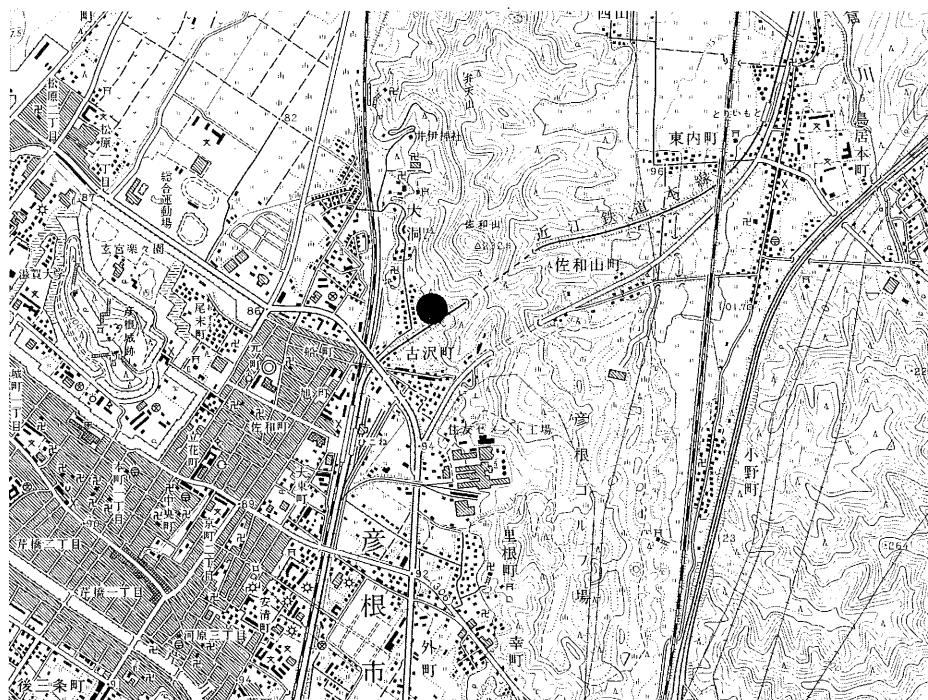


図1 湖東焼窯跡位置図(国土地理院発行1/25,000地形図による)

I 章 湖東焼の歴史

湖東焼は、江戸時代後期に彦根城下で焼かれた焼物である。城下の商人絹屋半兵衛たちにより創始され、井伊直亮・直弼・直憲の三藩主の代に彦根藩の御用窯として栄えた。この間、白く堅く焼き締まった磁器を中心に、染付・金襷手・赤絵・青磁などの細やかで美しい焼物を世に送り出した。ここでは、まず湖東焼の歴史をふり返ることからはじめよう。

絹屋半兵衛は城下の内船町に店を構える古着商であった。古着商は現在ではすたれだが、かつては主力的な商品で、半兵衛も相当の資力をもった商人であったと思われる。彼は古着の仕入れを京都でおこなった。仕入れの道中、京焼を垣間見る機会も多かったに違いない。当時、京焼は茶花道宗家や文人の好みを背景に陶器生産を伝統的に堅持する一方で、新しく、伊万里や瀬戸などの技術的援用を受けて磁器生産を指向し始めていた。

文化12年(1829)、半兵衛は、京都に来ていた伊万里の職人をともなって帰り、彦根城下の商人2人を誘って共同出資の形で、磁器を焼く窯を興すことにした。仲間となった2人は、同じく古着商を営む油屋町の平助と、御蔵手代の澤町の宇兵衛。彼らは町奉行に願い出て、城下町の西方にある芹川左岸の晒山に窯を築き、細工場を建てた。初窯は失敗であった。そして翌年、二度目の窯は何とか成功し、藩主に献上できるまでになった。ところが、仲間3人のうち平助がはやくもこの事業からおり、窯場も佐和山山麓の餅木谷に移すことになる。ここでの初窯は成功した。ただ経営は相変わらず苦しく、宇兵衛も去り、天保2年(1831)からは半兵衛が単独で困難な事業をすすめることになる。

絹屋窯は13年間続いた。この間、半兵衛はもとより、伊万里のちに瀬戸などからも招聘された職人の努力の甲斐あって、染付や赤絵など相当の良品を産することができるようになった。個人経営で一刻も早い成功をみるには、技術を自己開発するより職人を招いて窯を運営させた方がよい。その意味で半兵衛の狙いは効を奏したといえる。しかし、半兵衛にはもう一つの大きな課題があった。それは販路の開拓である。半兵衛は苦心のあげく、製品を大坂の瀬戸物問屋に卸し、地場の茶碗屋にも売ったようである。ただ、伊万里と瀬戸が量産体制をとって制している市場に、一介の商人が食い込む困難は計り知れないものがあったであろう。半兵衛は13年間に2回、最初は天保5年(1834)に銀5貫目、2度目は天保12年(1841)に銀15貫目を、それぞれ彦根藩の国産方から借用している。天保12年の借用時、先の銀5貫目はいまだ完全には返済していなかった。いかに

殖産興業のための貸し付けとはいえ、優遇の域を越えている。この時点で彦根藩には、将来この窯を藩直営にしようとする思惑が既に生まれていたようである。

そして天保13年(1842)、絹屋窯は御用窯として彦根藩に召し上げられ、藩の直営となつた。藩主は12代の井伊直亮。直亮は雅楽器収集に代表されるように、美術品をこよなく愛好する人物であったという。彼のもとで、湖東焼は洗練された高級品生産にますます拍車がかけられることになった。瀬戸・九谷・京都の各窯から多くの職人が招かれ、窯や関連施設が大幅に増改築された。そして、直亮が期待した優秀な作品が、しだいに市中にも出まわるようになる。しかし、世はすでに平穏泰平とは言い難く、直亮は湖東焼にさほど本腰を入れないまま、相州沿岸警備など東奔西走の渦中でこの世を去る。

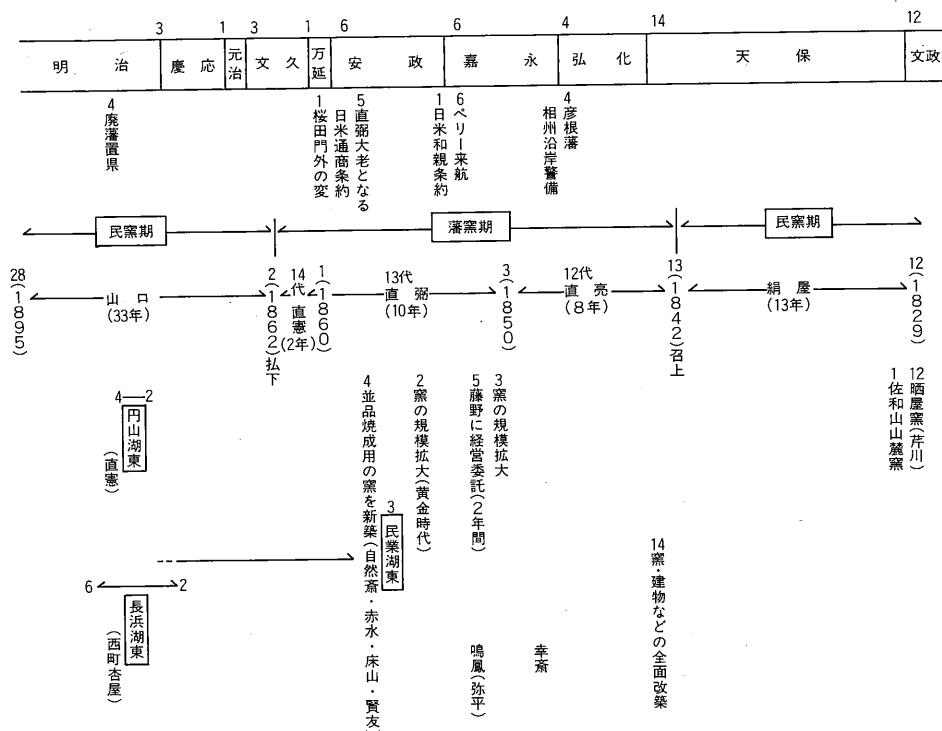
直亮の後を受けて、直弼が13代藩主となった。嘉永3年(1850)のことである。直弼は、不遇な部屋住みとして「埋木舎」生活を送る頃から、楽焼を介し焼物に強い興味をいだいていた。彼は藩主となるや直ちに、従来の五間の窯を七間に拡張し、職人の獲得と養成に力を注いだ。職人の招聘は、最盛期には数十人に及んだという。成型のための細工師、素地に絵をかく絵付師、それぞれの良工が各地から扶持をつけて雇い込まれた。一方、藩内からも将来を見込んで子供を招き、良工の下に配して人材の養成に努めた。こうした技術陣営を背景に、高級品生産という湖東焼当初来の目的は定着し、湖東焼の名はしだいに世の知るところとなった。この頃から藩窯の製品は「湖東」の二字に統一され、他の銘文を入れることが禁じられるようになった。刻印も二重枠に楷書で「湖東」と刻ませた。

湖東焼の経営上、残すところは、その製品の販売体制である。絹屋窯の弱点も実はここにあった。絹屋半兵衛が藩の直営とすることに同意した本意は、量産体制をとって市場を独占している伊万里と瀬戸に、一介の商人が食い込もうとする困難を藩に託したのであろう。彦根藩ではこれを受けて高級品生産を明確に打ち出し、量産体制の結果日用品が主流となっている伊万里や瀬戸に介入することを試みた。湖東焼は、京都・大坂の藩の売捌所で御用商人を通して販売され、ある程度の成果を得ていたようである。ただ、頻繁な設備投資のために、財政はあいかわらず苦しかった。嘉永5年から約2年間、藩内の豪商藤野四郎兵衛に経営を委託した際も、さすがの豪商をもってしても金一千両余の損失を出して経営を辞退している。経費を食う藩窯を廃止するか、存続するかといった議論が、普譜奉行を中心に行われたのも、この頃のことである。

安政2年(1855)、藩窯の大改革が始まった。この大改革は、藩窯に対する消極論を殆ど意に介さない拡大計画であった。窯場の規模は一挙に二倍となり、それに見合うように職制も拡充した。ここに湖東焼は黄金時代を迎えたのである。高級品生産という目標

は変わっていない。この時代に多くの逸品が焼成され、湖東焼の名はゆるぎないものとなつた。

ところで藩窯期には、藩のお抱え職人以外にも、湖東焼に携わる人々が現れた。その一群の人々は客分待遇の絵付師である。幸斎と鳴鳳が名高い。幸斎は、直亮の時代に彦根に来て仕事をし、直弼の時代になってほどなく京都に去った人物。飛驒高山の僧が還俗して、絵を京都で学んだと伝える。直弼が典医上田成伴へ宛てた書状に、幸斎が京都へ去ったのを大変惜しむ一文がある。鳴鳳は京都の寺侍であったが、妻子と鸞英という弟を伴い彦根に来て、数年のち伊勢に去った人物。直弼時代初め頃のこと。井伊家に残る湖東焼の多くが鳴鳳の作品で占められている。在藩期間が短いことを考慮すると、彼が彦根で制作した多くが井伊家に納められることになる。他的一群の人々は、安政3年(1856)、株仲間を結成して、主に藩窯の素地を用い自宅で上絵付をした絵付師である。城下白壁町の賢友、犬上郡高宮村の赤水、坂田郡原村の床山、坂田郡鳥居本村の自然斎の四人。賢友がお抱え職人でもあった以外は、三人とも中山道沿いに自宅をかま



湖東焼略年表

え、旅人を相手に土産物としても売り出していた。中でも自然斎の作品は多数現存している。ここに述べた人々は、藩のお抱え職人として描いていないため、自分の銘を器の要所に配することができた。

べた人々は、藩のお抱え職人として描いていないため、自分の銘を器の要所に配することができた。

かくして軌道に乗りかけたかにみえた湖東焼であるが、黄金時代の幕切れは突然やってしまった。万延元年（1860）3月3日、直弼が桜田門外で花と散るに及び、彦根そして窯場は騒然となった。湖東焼はパトロンを失い、そのうえ藩が苦境に立たされたのである。こうなると職人の動きは早い。またたく間に約半数が彦根を出奔してしまった。からうじて残った職人により、約二年の間、窯の火は点り続ける。まるで直弼の死を弔うかのように。しかし、次々と去る職人にはいかんともし難く、文久2年（1862）、幼君直憲のもとで、藩窯は21年の歴史を閉じた。その後は、窯場の設備・機具・材料など一切の払い下げを受けた山口喜平らにより、再び民窯として明治28年まで細々と存続する。しかし、製品からはかっての湖東焼の面影がしだいに薄れていった。技術も客筋も、当初のままでは有り得なかったのである。

II章 窯場を描いた資料

湖東焼は、絹屋窯の初年のみ芹川左岸の晒山に窯が築かれるが、その後は藩窯期を経て山口窯に至るまで、一貫として佐和山山麓の餅木谷で焼かれた。晒山については、およその位置が想定されるものの、資料は皆無であり、当時の面影もほとんど残っていない。一方、餅木谷は、次に述べる資料が遺存しており、次章で詳述するように窯跡が比較的良好な状態で現存している。本章では、この餅木谷の窯場を描いた資料について、少し詳しく見ておくことにしよう。

餅木谷の窯場を描いた資料は2つある。1つは「染付彦根名所図大皿」(写真1)に描かれた名所絵4景のうちの1景(写真2)。もう1つは「御陶器場所地面并諸御建前御絵図」(写真3)である。「染付彦根名所図大皿」は、高さ10.3cm、口径51.0cm。内面の周囲が四分されて、窯場のほか松原内湖などの彦根名所が染付で描かれる。見込には丸龍が配され、内に弘化年製(1844~1848)の年号を記す。裏面は周辺に花唐草文、高台内中央に二重角柱をもうけて内に「湖東」と楷書で付す。弘化年間は、湖東焼が絹屋窯から藩窯へと移行した初期にあたり、藩主直亮のもとで高級品生産に本腰が入れられた時期。窯場の全面改築が計られ、弘化2年にはこれまでの古窯が廃されて5房の丸窯が築かれる。大皿の窯場の景色は、その頃の様子を描いたものと思われる。窯は焼成の最中らしく煙が勢いよく吹き上げており、横には戸を突き上げて風通しを良くした細工場らしい長棟、その前に土干しの施設などがあり、屋根の並びを見る限り、次の絵図に詳しく描かれた各建物施設の基本が、すでにこの時期に成立していることがわかる。

「御陶器場所地面并諸御建前御絵図」は、縦64.5cm、横94.7cmを計る1鋪の絵図である。安政2年(1855)に彦根藩普請方が作成したもので、大鳥居彦六、浅居喜三郎、以下、林田彦五郎、佐野五郎介、服部栄太、伊藤杣次、澤捨藏の名が記されている。安政2年は、藩主直弼の下で窯場が大幅に改革され、規模の拡大が計られて黄金時代の幕開けとなった年である。この絵図も、こうした大改革の様子を記録したものと思われる。図2を参考にしながら、窯場の作業工程に即して少し詳しく見ておこう。

窯場には、陶器の素地となる陶土や磁器の素地となる磁石が、俵詰めなどで送られてくる。これを臼で挽き、ふるいにかけて粉末とし、さらに微粉にするために水で漉す作業がまず行われる。運び込まれた陶土や磁石は、一度11土置場あたりに降ろされた後、5物入小屋并唐臼場や10水屋小屋の臼で挽かれ、15土漉場で微粉にされた。15土漉場の上下にある14溜池や16用水溜は、水簸の際に用いる水を確保したものであろう。こうし



写真1 染付彦根名所図大皿

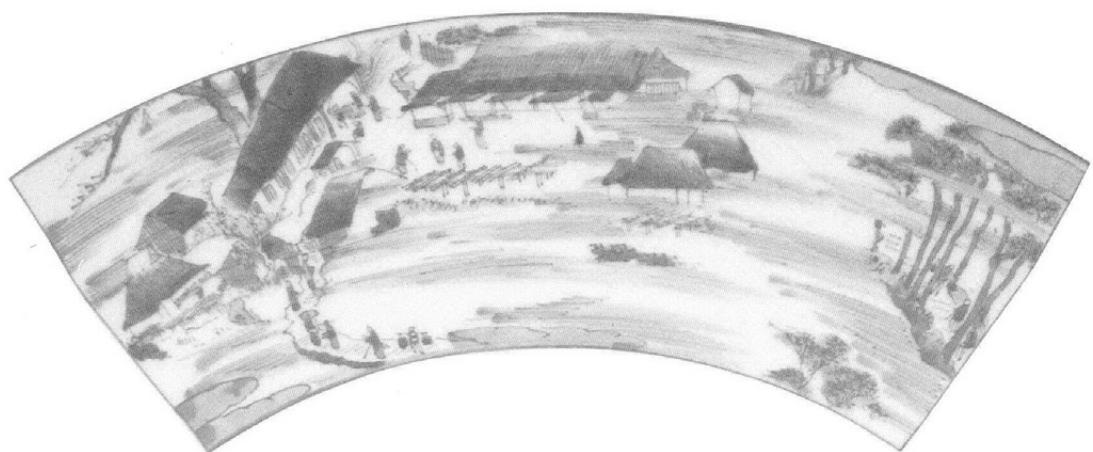


写真2 染付彦根名所図大皿(部分)



写真3 御陶器場所地面并諸御建前御絵図

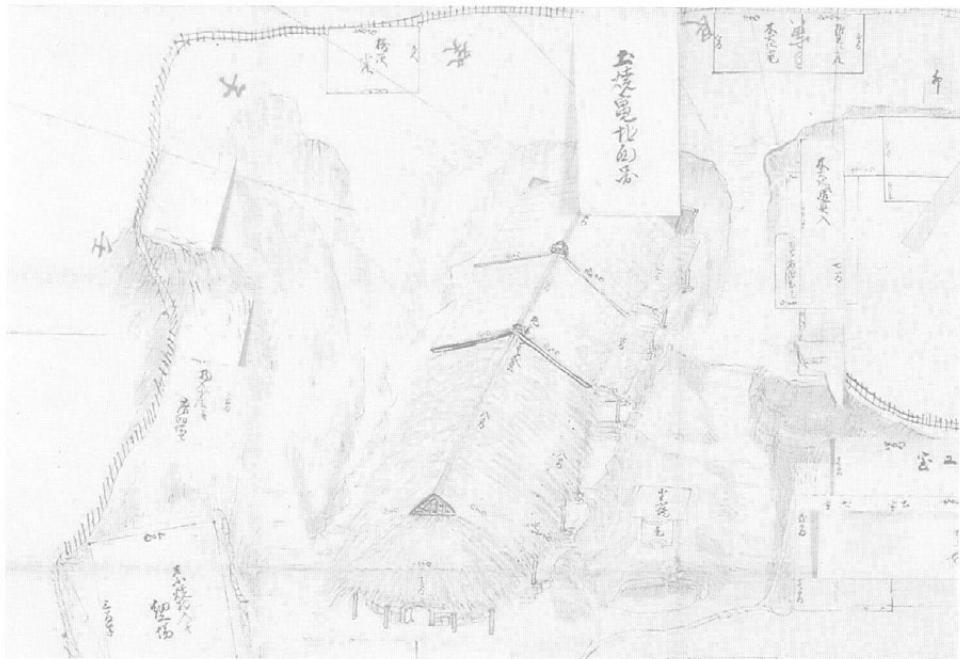


写真4 御陶器場所地面并諸御建前御絵図(部分)

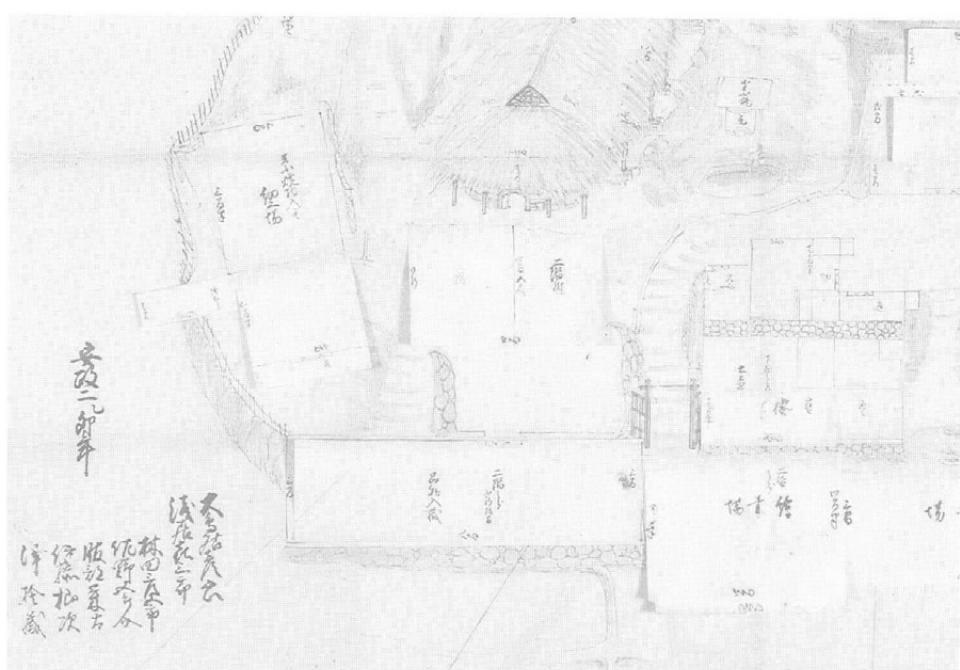


写真5 御陶器場所地面并諸御建前御絵図(部分)

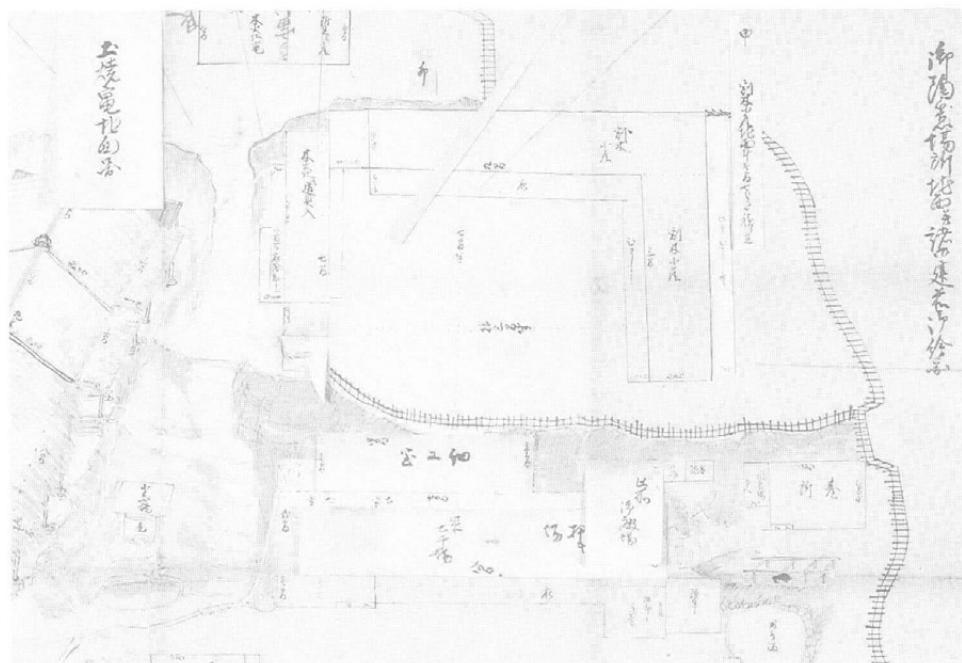


写真6 御陶器場所地面并諸御建前御絵図(部分)

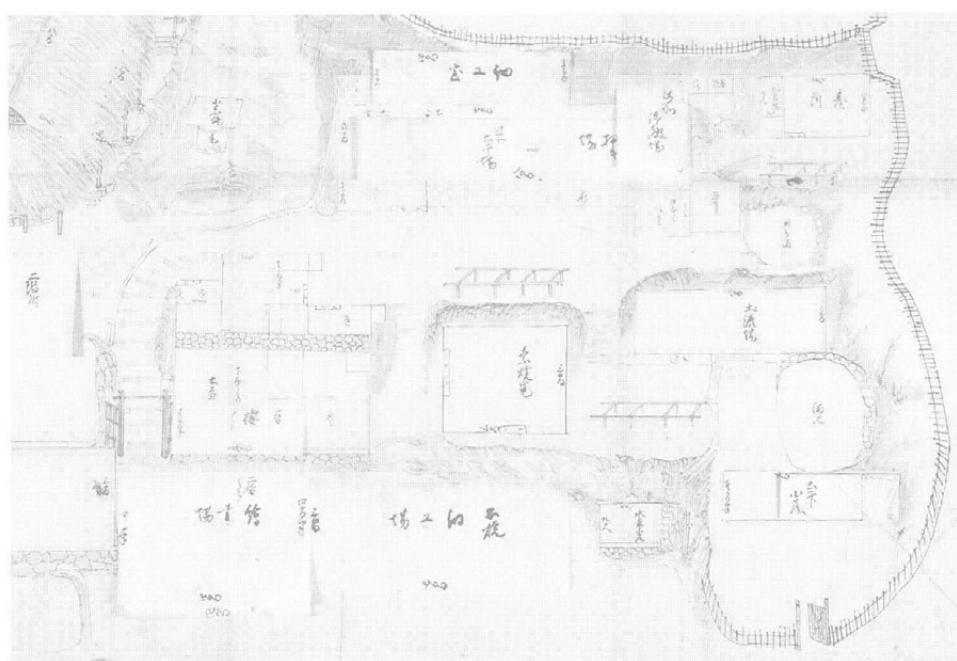
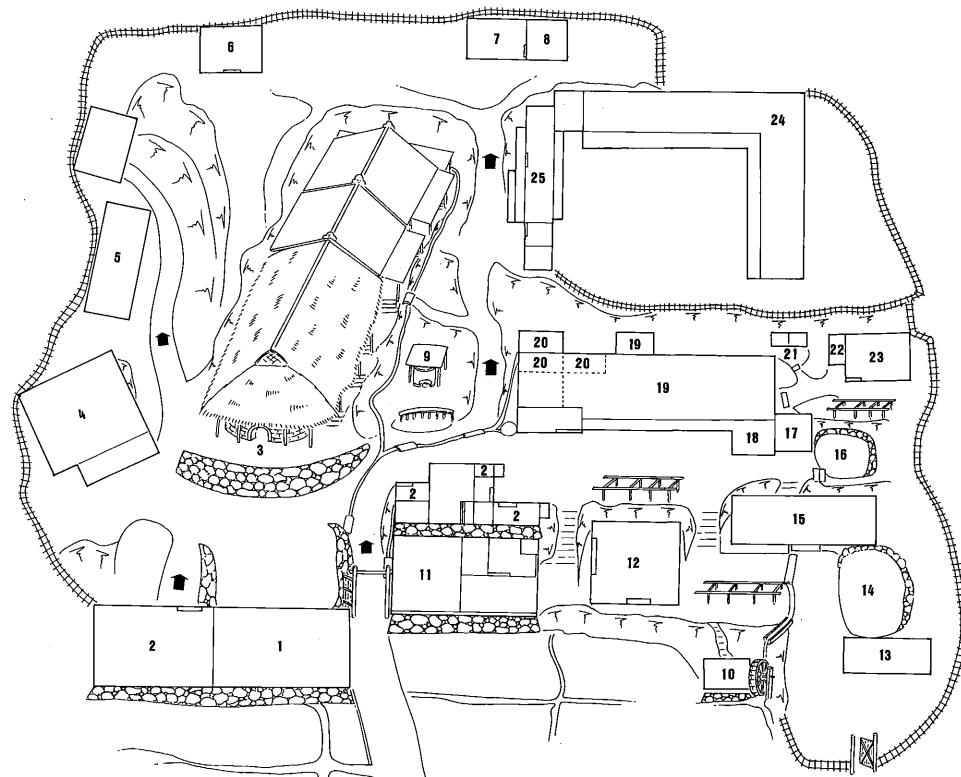


写真7 御陶器場所地面并諸御建前御絵図(部分)



1. 板間	3間×4間半	13. 土干小屋	1間半×3間
2. 座	3間×3間半ほか	14. 溜池	
3. 丸窯 薦葺 板葺	3間×8間 3間×6間	15. 土漉場	3間×8間
4. 素焼物入并細工場	3間×3間半	16. 用水溜	
5. 物入小屋并唐臼場	3間	17. 附足し	1間
6. 柞灰小屋	2間半×9尺	18. 附卸し	1間
7. 木火仕窯	4間×2間	19. 細工場	2間×7間ほか
8. 附足し小屋	2間×2間半	20. 土室	
9. 小素焼窯		21. 雪隠	
10. 水車小屋	9尺×9尺	22. 風呂場	9尺×9尺
11. 土置場		23. 台所	2間半×3間
12. 素焼窯	3間×3間	24. 割木小屋	2間×12間
		25. 木火仕并道具入	7間

安政2年の湖東焼窯場(絵図をもとに作図)

て得た素地を用いて作品の成形が行われる。成形には袋物師・型物師・彫物師などが分業で事にあたった。19細工場は、彼らの作業場であろう。成形が終わると乾燥に移される。乾燥は屋内のほか屋外乾燥が行われ、19細工場の前庭などに描かれた3基の棚風の施設がそれに供されたものと思われる。乾燥後、作品は一度素焼される。12素焼窯や9小素焼窯で素焼された。そして本格的な絵付に入る。湖東焼は、さまざまな釉薬と技法を用いて絵付を行った。例えば呉須染付を用いた釉下彩色や青磁などの着色釉、色絵・赤絵・金彩・銀彩などの上絵付、さらにそれらの基本となる透明釉の施釉。透明釉は長石粉と柞木(いすのき)の灰を混ぜ合わせて作る。柞灰は薩摩産のものが著名であるが、たいへん高価であり彦根藩内でも育成されたという。この柞灰を保管する専用の小屋が6柞灰小屋である。こうした絵付の作業は4素焼物入并細工場などで行われたものと思われる。そして、いよいよ丸窯を用いて本焼がなされる。丸窯は、山麓の斜面に階段を造成して構築された連房式登窯。焚口と煙出の間の各房に作品と割木が詰められ、焚口から火を入れると、連続する各房が煙道となり、上方へしだいに熱がまわり、やがて発火して作品が焼成される。丸窯は、この年の大改革で7房から9房に拡大されている。絵図では下方の屋根が藁葺、上方が板葺に表現されている。焼成に用いる割木は樹脂に富む松割木が使用されたが、その松を燃焼し易いように乾燥させるのが木火仕(こかし)である。25木火仕并道具入や24割木小屋などはその関連の建物。7木火仕窯があるところから、割木は強制乾燥させていたようである。これで窯場の一応の作業工程は完了するが、こうした工程とは別に、表門に入った左右の建物の2座と記された部屋などは、窯場を管理運営する役人などが詰めていた所と予想され、また23台所、22風呂場、21雪隠などの施設も準備されていた。

ところで、絵図を仔細に見ると、要所に幾つかの貼り紙が付されているのに気がつく。図2には繁雑になるため記載しなかったが、安政2年以降の増改築時に貼り付けたものであろう。細工場、絵描場、品物入藏などの名が散見され、一部規模を拡張した様子も認められる。安政4年、安政5年、安政6年と、ほとんど毎年のように増改築がなされた記録が残っており、そのことの一部が貼り紙を付して記されたものと思われる。

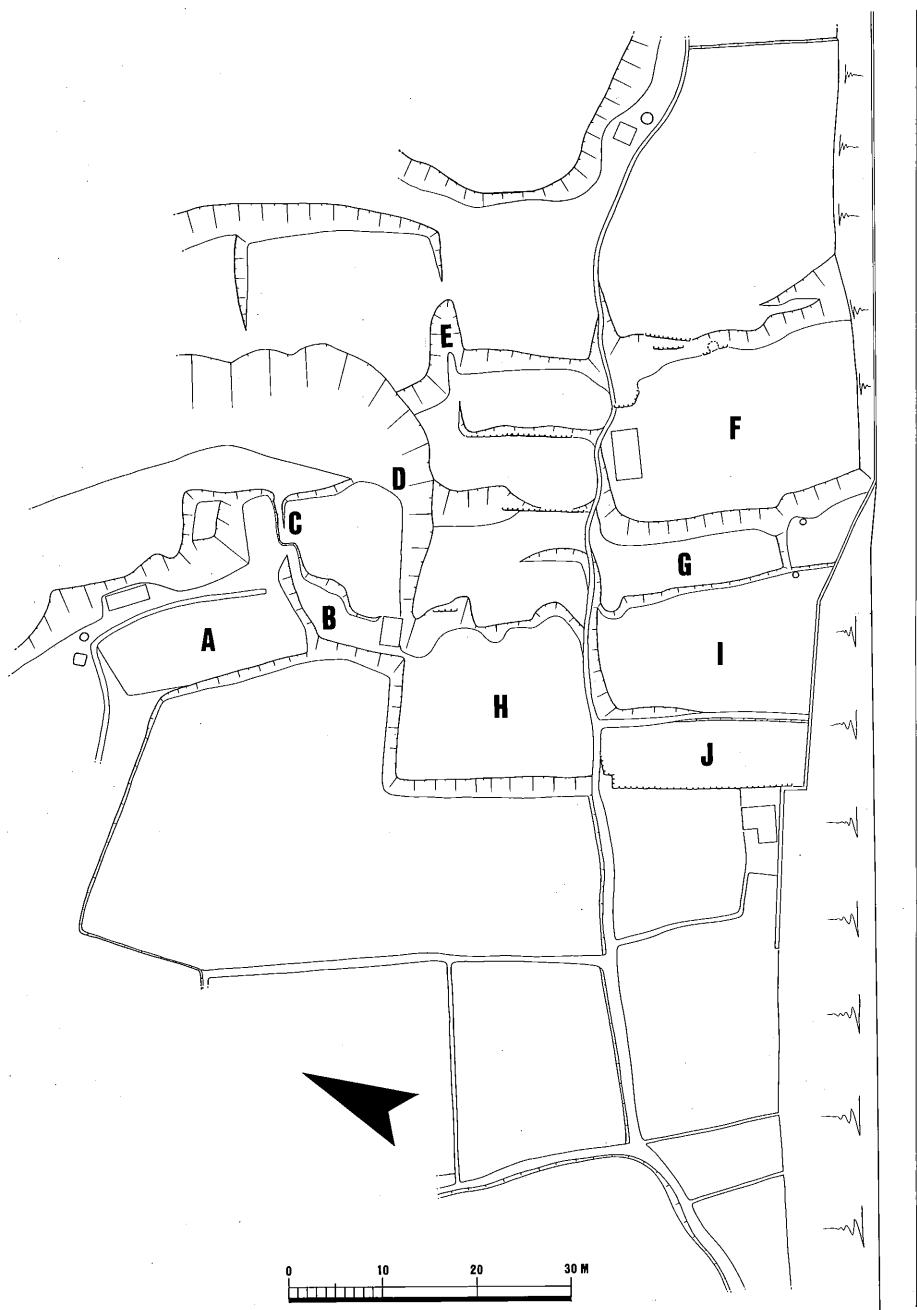


図3 湖東焼窯場跡測量図

III章 測量調査の成果

窯業技術を駆使し、数々の優品を世に送り出した湖東焼の窯場は、今は静かに佐和山山麓に眠っている。現地を訪れると、窯跡を示す石柱のほかに往時を物語るものもなく、一帯は畠や荒地それに竹林で覆われ、その傍らを近江鉄道の線路が走っている。これまで窯跡について正確な調査が行われたことがなく、ただ、いまでも一帯で湖東焼の破片が採集されること、あるいは近江鉄道の施設によって窯跡のほとんどが破壊されてしまったという憶測めいた話を聞くことがあった。今回の測量調査の目的は、当地を正確に測量調査し、II章で述べた絵図などの資料とも照合させて、窯跡の実体を鮮明にすることにある。

測量調査は、要所に測量ポイントを設定し、そのポイントを起点に一帯の平板実測を行った。調査域は山麓であるため勾配があり、とくに竹の林立する竹林の測量は難渋を極めたが、その測量成果は左図（図3）のとおりである。図中のA～Jの文字は、次章の遺物採集地点を示す。測量を実施する過程で留意された点について、以下に述べることにしよう。

窯場跡へ至るには、すぐ南に近江鉄道の線路を仰ぎながら、佐和山へ向かう小道を歩む。この小道は、II章の大皿や絵図に描かれている小道に相応するものと思われる。かつては、職人や役人が毎日のように歩んだことであろう。小道の周辺は、当初は水田であるが、やがて勾配のつくあたりから南に畠地、北に荒地そして竹林をみるようになる。北の竹林は、よく目を凝らすと、小さな段とテラスがほぼ間隔を同じくして斜面に沿い連続しているのが認められる。段の一部は煉瓦積みの痕跡を残しており、この箇所に連房式の登窯が存在していたものと予測される。連房式登窯は、最下方に焚口（燃焼室）、最上部に煙道部があり、両者間は幾つもの房で構成される。段の煉瓦積みはこの房の壁面、テラスは床であったと思われる。ちなみにレンガ積みの幅は、現存長11.0mと9.0m。両者間の距離は8.0mである。この数値が、もし1つの房の大きさを示すのであれば、たいへん大きな房であったことになる。現状では、同様の数値の段とテラスが4ないし5を数える。

この地のさらに北側一帯は、次章に詳述するように多量の遺物が採集された所である。それはB・C・D・Eの各地点に密集する。不用となった窯道具や焼き上がった作品の中の不良品が一帯に投棄されたことを物語るものであろう。これらの地点の中でB・C地点なかでもB地点の採集遺物中には半製品つまり素焼のままの作品が、比較的高い率

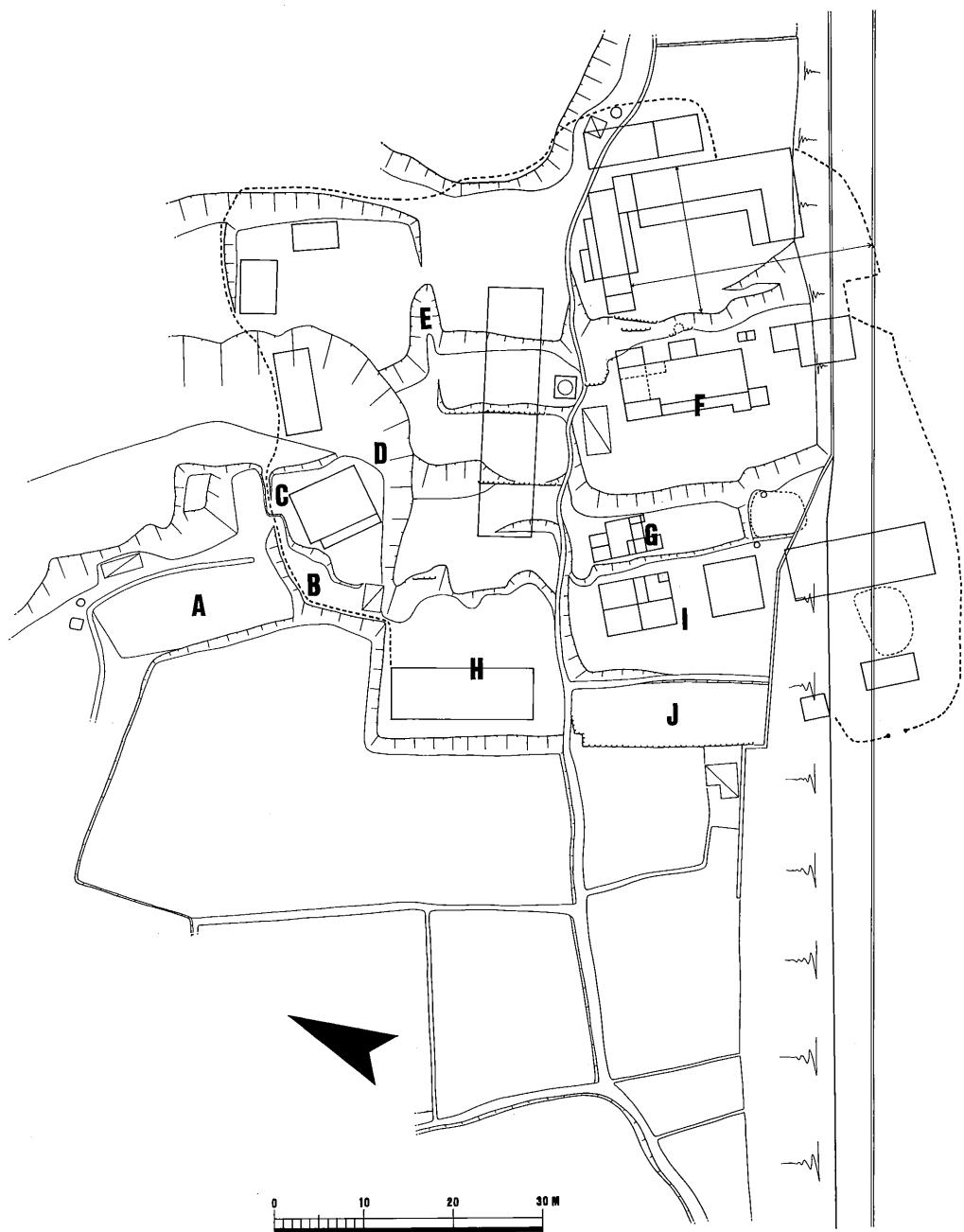


図4 湖東焼窯場跡測量図に絵図を重ねた想定図

で採集された。絵図をみると、窯の北西には素焼物入并細工場の建物が描かれており、この長方形のテラスはその建物が立っていた位置に相応するものと思われる。

蛇行する小道の南側にも、大小のテラスが存在する。現況はほとんどが畠地で、かつての面影はまったく残っていないが、絵図に描かれたような各種の機能を持つ建物が立っていたのであろう。なお、G地点の一段低い南側は、絵図に用水溜の記載があるあたりだが、現在は数基の井戸が掘られ、鉄気を含んだ地下水が自噴する。

測量調査の過程で気がついたのは、以上のような点である。このことに留意しながら現況測量図にII章の絵図を重ねると、およそ図4のごとくである。ただし、これはあくまでも想定図。現況にはうまくそぐわない建物もあり、また、安政2年以降の増改築を考えしていない。ただ、発掘調査など、さらに一步進んだ調査方法をとらない限り、この想定図以上の考察は望めないものと思われる。この想定図をみると、近江鉄道の線路によって破壊された箇所は意外に少なく、窯場全体の南端に限られるようであり、主要な部分が遺存しているものと予想される。今後、よりいっそうの精査が期待されるところである。



写真8 連房式登窯の痕跡を残す煉瓦積み

IV章 採集遺物

測量調査に付随して、遺物の表面採集を行った。採集地点は、図3に記入したようにA～Jの10地点に分けた。その結果、B～E地点で遺物が集中的に採集された。しかも、匣鉢をはじめとする窯道具が過半を占めている。これらの地点が、III章で述べた連房式登窯の周辺にあたることと関連するものであろう。窯道具以外は、陶器及び磁器の不良品である。陶器がほとんどで、磁器はわずかに散見されるのみ。陶器・磁器ともに日常雑器が圧倒的で、往年の湖東焼を代表するような高級品は極々わずかである。明治時代以降の山口窯の遺物と思われる。以下、各地点ごとに採集遺物を概観することにしよう。

A 地点 A地点は測量区北西端の低い畠地である。B・C地点から流入したかと思われる遺物が若干採集されるが、いずれも細片であり、実測するに足るものは見当たらなかった。

B 地点 A地点より一段高い平担地。現在は荒地となっている。C地点と共有する長方形の平担面であったと思われるが、現状では若干の落差があるため、やや低い方をB地点とした。B地点では、北西辺から西側にL字に連なる落ちぎわに、特に多量の遺物が存在した。本書に掲載したのは1～24。2が染付の磁器碗である以外は、いずれも陶器。2は体部外面に唐花唐草文をあしらい、底部には角枠に「湖」の文字がひそむ。呉須の発色は良好である。1は行平鍋の蓋。外面の中位に連続する刺突痕が施され、その上下に鉄釉を帶状に掛ける。内面には灰釉が一面に塗られる。明治期の湖東焼に良く見られるものである。3は灰釉を掛けた灯明具の油受皿。4～6は灰釉の肌に白釉で大きく丸や巴の文様を置き、そこに鉄絵などで梅樹や芭を描いた鉢。4と6の見込には、3つの円錐ピンが融着して残る。7～9は3足の植木鉢。8・9は鬼面の獸足で、9には桐紋が貼り付けられている。10～15は行平鍋の把手。型物である。10は樹枝に鳥、11・12は菊、13は鳳凰、14は松に蟬、15は福寿草がそれぞれ浮文様で型押しされている。14の裏面には「湖東」の銘も入る。16は徳利。前述の鉢と同様に灰釉を漬け掛けしたあと白釉で粗く刷毛目を置き、そこに鉄絵で草花文を描く。17は大型の急須である。体部外面を白絵土で覆い、鉄絵と呉須染付で文様を配す。染付の文様は松に洲浜か。この急須は、焼成の段階で過度の熱により匣鉢もろともくずれて融着している。以上、1～17の作品中、1・7・8・9・10・11・13・14の8点が本焼以前の素焼のままのもの。III章で述べたように、B・C地点あたりは、かつて素焼物を入れた建物が存在していた地所に相応すると予測され、素焼物が多く採集されるのはその証左となりえよう。

18~24は窯道具。18・19それに20は、窯詰めで棚積みをする際に用いたと考えられる柱状支脚と台。自然釉が掛かって灰緑色を呈する部分がある。21は長脚ピン。匣鉢内で皿などを重ね焼きする時、幾つかを匣鉢の側辺に置いて上位の作品を受ける道具。22は輪トチン。大型で断面が半円形を呈している。23は円盤上の焼台に3つの円錐ピンが乗ったもの。24は粘土紐を曲げて作った輪トチンだが、三方を押さえて三角とする。

C地点 C地点はB地点に連なる平坦面。北西側の小畔は遺物の集積により形成されたもの。25は全面に灰釉を掛けた蓋。5枚が融着する。26は輪トチン。

D地点 D地点は連房式登窯の北側に位置する傾斜地。この斜面一帯に遺物が累々と堆積している。27~56の30点を掲載した。その内28~32の5点が磁器。27と33~43は陶器。44~56が窯道具である。28~31は呉須染付、32は白磁の作品。28の碗は体部外面に波に千鳥をあしらったもの。見込には小さく芙蓉が配される。呉須の発色も良く、丁寧に描かれている。29・30は底部中央に1孔を穿った酒盃。29は内外面に花文様を、また30は内外面に文字が配される。29の口縁端にはトチンが1つ融着する。染付の下地に施した白絵土の掛け方が雑だが、呉須はいがいに精良。31は合子の蓋か。松の古木が描かれる。素地が緻密で呉須の発色も良好である。32は水滴。型物で、表面に蕪が浮文様で配される。31・32の両作品は江戸期に遡るものかもしれない。

27は内面にかえりをもつ山形の蓋。頂部に小孔が穿たれ、3つの豚耳と沈線で飾る。表面のみ灰釉を掛けている。33・34は灰釉の肌に鉄絵などで梅樹や竹を描いた鉢。34は素地内の火ぶくれが著しい。35は体部外面に灰釉を掛けた獸足の植木鉢。36も大型の植木鉢か。短い円柱形の足が付き、体部外面は白絵土上に呉須で宝珠と唐草を描いた染付陶器である。37は3足の風炉。低い火口が付く。火口の下端は外下方に張り出している。38~43はいずれも行平鍋の把手の部分。38は10と同型の樹枝に鳥。39・41は14と同型の松に蟬。やはり裏面に「湖東」の銘が入っている。40は表面に「湖東」の銘を入れたもの。42・43は11・12と同じ菊文様。

44は窯道具の柱状支脚。上下両端を肥大化させ、端面は平坦に仕上げて受けを良くする。下端に染付磁器が融着する。45・46は裾の広がる中空の脚を付けた円盤状焼台。46の上端面は回転糸切整形を施している。47~55はトチン。47・49・50・51は小型の柱状トチン。48・54・55は円盤状、52・53は輪状を呈す。そして56は長脚ピンである。

E地点 E地点は連房式登窯の北側にある窯に平行の凹地。この凹地は遺物で埋め尽くされているといつても過言ではない。本書に掲載した約半数の遺物がここで採集されたものである。内訳は磁器4点、陶器19点、窯道具28点である。磁器は59~62で、いずれも呉須染付の作品。61・62は茶碗。59・60はその蓋である。59は大きく上反りした蓋。

表面に菊と牡丹の花をあしらい、高台状の摘みの内側には判読不明の銘を入れる。裏面には大きく丸に「成化年製」の文字。呉須の発色は良好である。60の表面は牡丹唐草で摘み内に判読不明の銘。裏面は松竹梅を連ねて丸文とする。61・62は体部外面に牡丹唐草、見込に「寿」の字を配す。62の蓋が60か。60～62の呉須は鉄分を含んで褐色を帯びている。

57・58は急須または土瓶の蓋。ともに白絵土の上に呉須で簡易な文様を描いている。63・64は浅い小型の端反茶碗。白絵土を内外に塗り、内には「井」や二ッ輪文を配す。64の高台脇には二重小判形枠に「湖東」の銘が楷書で押印されている。65～69は鉢。65～67には菊、68には梅竹、69には梅樹をそれぞれ鉄絵などで描く。69には円錐ピン4つが融着したままである。70～74は平行鍋。70・71はその蓋、72～74はその身である。鉄釉のほか灰釉や白釉が掛けられている。75は白釉を掛けた徳利。「舟屋」の文字が判読される。76～78は行平鍋の把手。いずれも表面に「湖東」の銘が型押しされるが、76は77・78に比べて一まわり小型である。79は内外に灰釉を施した小皿4枚が重ね焼きにより融着してしまったもの。同様に80も鉢の融着品。鉢は灰釉の肌に鉄絵などで梅や竹を描く通有のものだが、大小の鉢が円錐ピンを用いて重ね焼きされていたことを物語る好資料。上端には匣鉢片も融着している。

81～89は匣鉢。86を除くいずれの匣鉢内にも、熱により変形し融着した染付の磁器碗が残る。染付磁器碗は62と同様のもの。体部外面に牡丹唐草、見込には「寿」の一字がひそむ。呉須は不良で鉄分のためやや褐色を帯びる。碗の高台下には円盤上のトチンが匣鉢底部の反りにあわせて置かれる。匣鉢は89のように何段か重ねて焼かれていたようであり、重ね部には83や84の痕跡が示すように大型の輪トチンが置かれていた模様。90～94は輪トチン。94は煉瓦風の焼台の上下に融着する。95～104は各種の焼台。95・96・98はわずかに山形をなし、中央が幾分へこむ。97は円盤状。99・100は脚付。脚の四方には半円形の切り込みが入る。101・102は円盤の中央に突起を設けるタイプ。103は中空の柱状脚付。104は大型の十字形。中央にわずかに窪む円孔がある。105は輪トチンの三方を押さえて三角形としたトチン。植木鉢底部の圧痕が残る。106は長脚ピン。107は窯詰めで棚積みの際、柱状支脚などとともに用いる台。側面に二ッ輪文が印刻されている。

F 地点 F地点は、かつての細工場あたり。作品の成形などが行われたと予測される地所で、採集遺物はさほど無く、わずかに計測されたのは108のトチンのみである。

G 地点 G地点はF地点のすぐ下方の地所。土干場などが存在したところと思われるが、このあたりも遺物はあまり散布しておらず、窯道具2点が計測可能な資料であった。109は上下端を太くした柱状支脚、110は低い山形の焼台である。110の上部の凹部には磁器

が輪状に融着した痕跡が認められる。

H地点 H地点は、役人の詰所などが設けられていた所で、上方の窯跡から流入したと思われる遺物が若干採集されるが、計測できるものは存在しなかった。

I地点 I地点は役人の詰所のほか、土置場や素焼窯などがあったと思われるあたり。北方の小道付近で、111～113の窯道具を採集した。111は上下の中央に浅く窪む円孔のある焼台。112は大型の柱状支脚。113は隅を面取りした大型の方形焼台。やはり中央に浅い円孔が認められる。

J地点 J地点は、安政2年以降の増築により、細工場や絵付場が設けられたと思われる地所である。遺物はさほど多くないが、114の染付茶碗などを採集した。染付茶碗の体部外面には呉須で牡丹の文様が描かれるが、焼成温度が低かったためか、表面の透明釉がほとんど剥離し呉須もおおかた流れ落ちている。呉須は鉄分を含んで褐色を帶びている。



写真9 E地点遺物散布状況

V章 まとめ

本書は、江戸時代後期に優品を数多く世に送り出した湖東焼窯場の測量調査の成果を収めたものである。測量に付随して、窯場関連絵図の検討および散布する遺物の採集を行い、あわせて本書に収録した。

今回の測量調査の主たる目的は、窯場跡を正確に測量し、絵図や散布する遺物なども検討資料に加えながら、窯場の実体を鮮明にすることにある。その結果は、図4に想定したとおりである。この想定図は、測量の過程で発見した連房式登窯の痕跡などから、現況にかつての窯場諸施設のおおよその位置関係を重ねたものである。それを見るかぎり、近江鉄道の線路の施設によって破壊された箇所は、窯場全体の南端部に限られ、窯場の主要な部分が遺存しているものと予想された。発掘調査など一步進んだ調査方法がとられることにより、窯場の姿がさらに鮮明になるものと期待される。

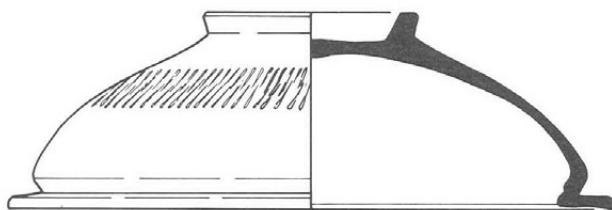
湖東焼は、従来、「まぼろし」を冠して呼ばれることが多かった。それは、黄金期の優品ばかりが著名となる反面で、それ以前あるいはそれ以後の作品、ましてそれらを焼成した窯場の実体が杳として知れないことに起因している。今回の測量調査は、こうしたいわば「まぼろしの湖東焼」を解き明かす第一歩でもある。今後ますます地道で堅実な調査の必要性を痛感している。



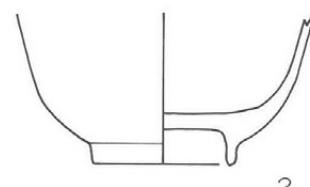
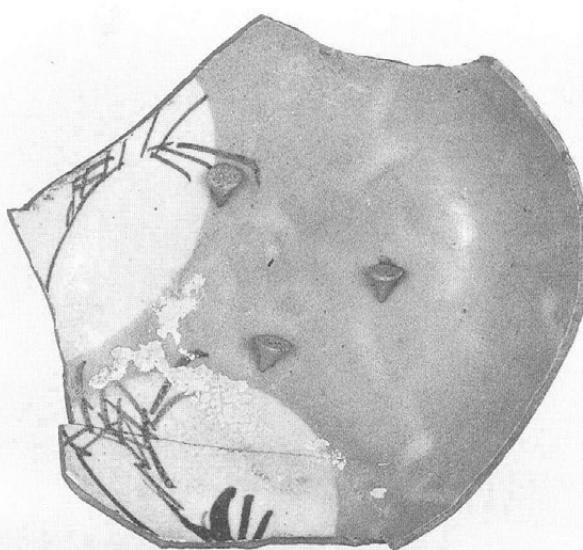
佐和山を背景に窯場跡を望む



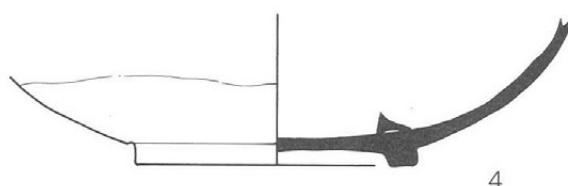
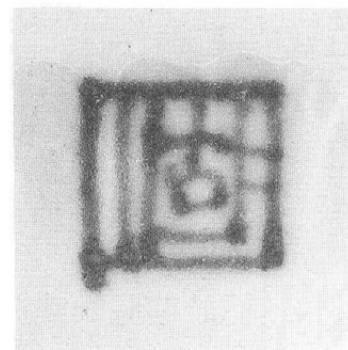
窯場跡の表口あたり



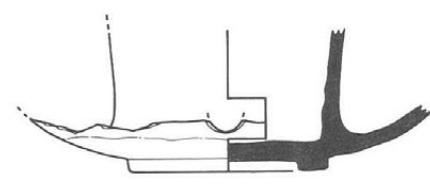
1



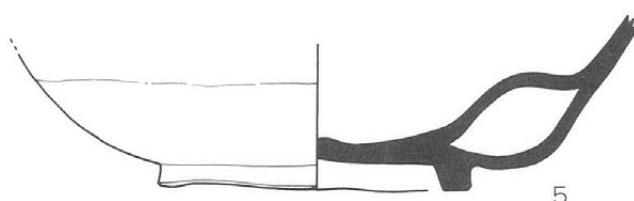
2



4



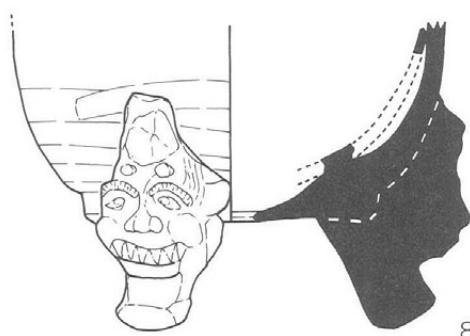
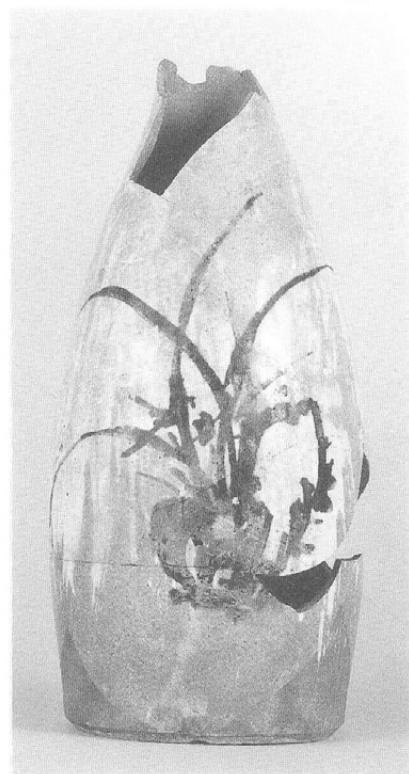
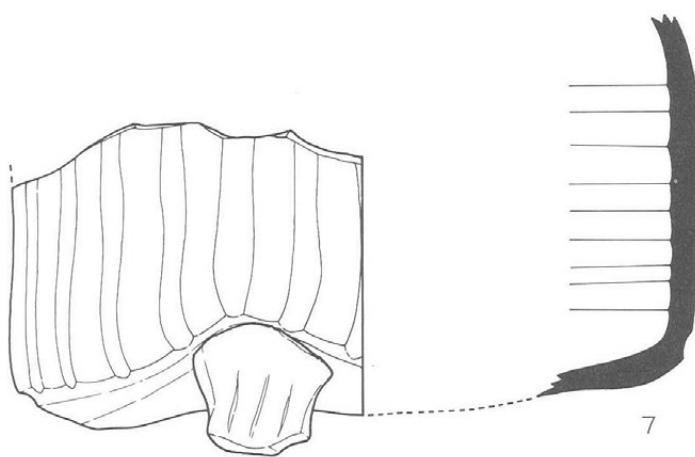
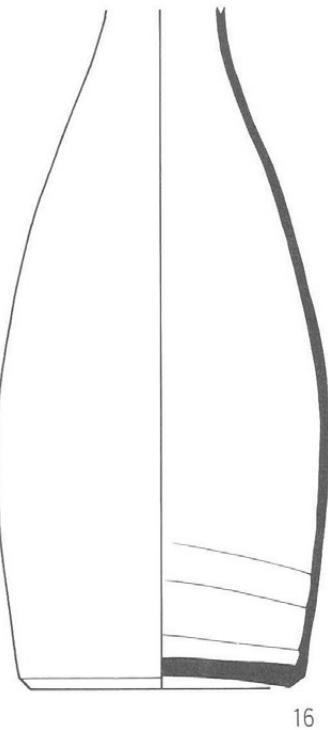
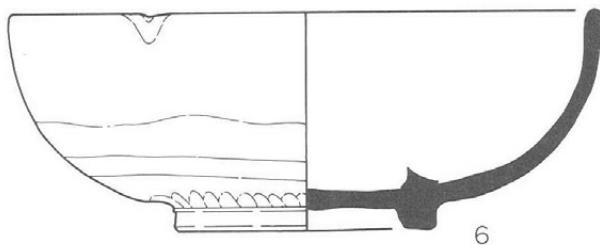
3



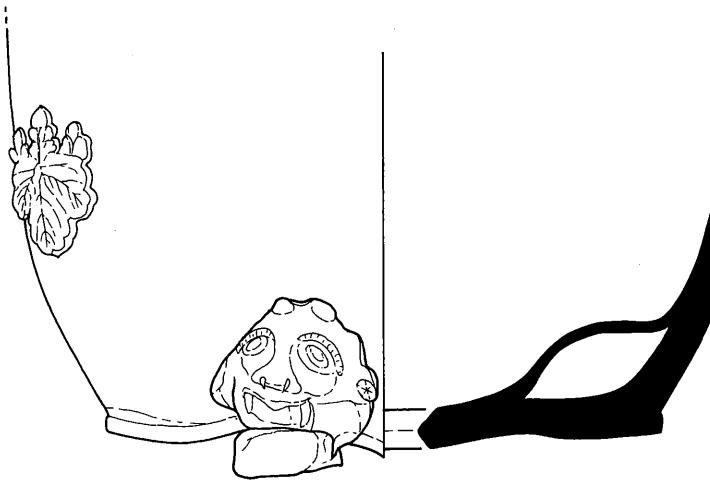
5



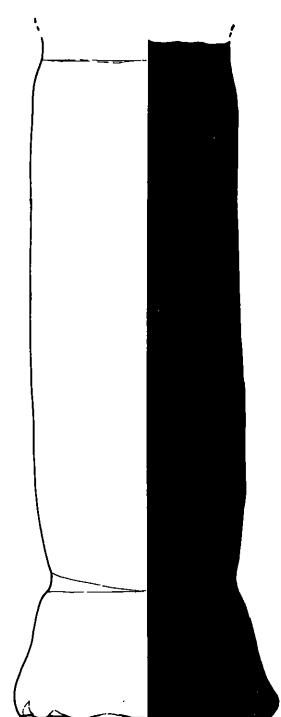
B 地点采集遗物



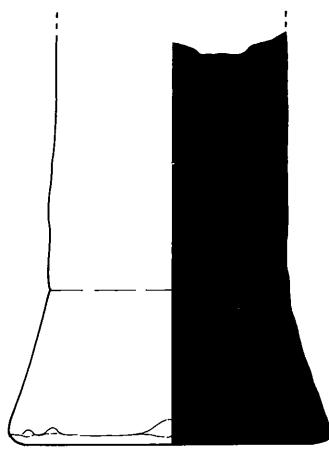
B 地点采集遗物



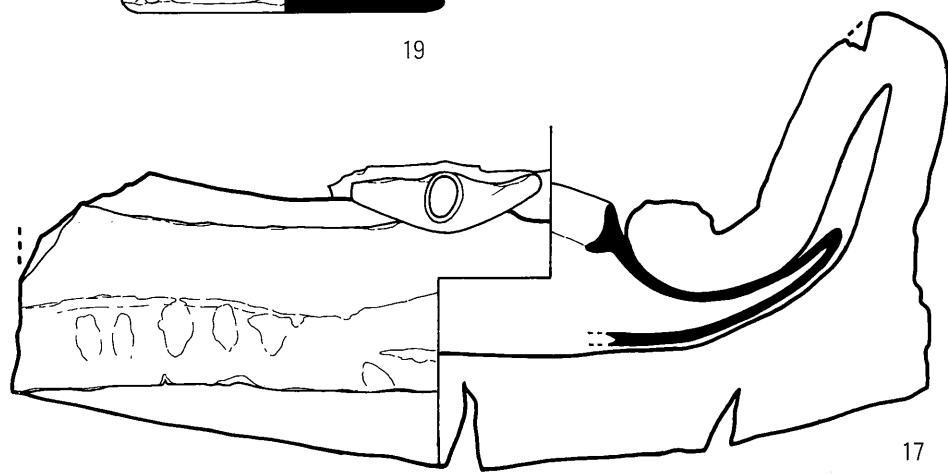
9



18

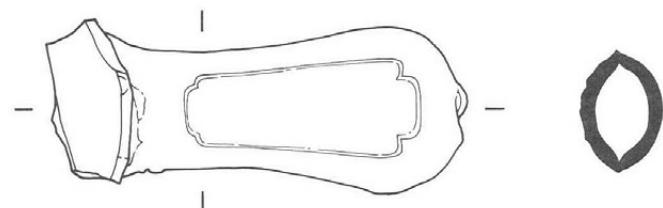
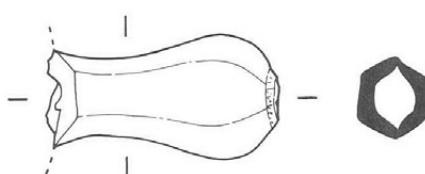
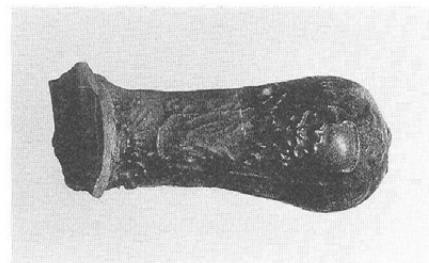


19



17

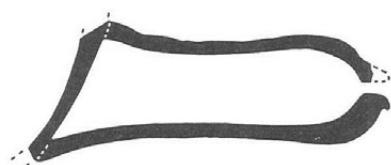
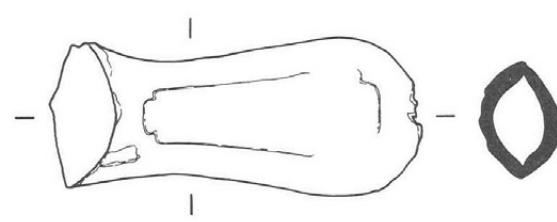
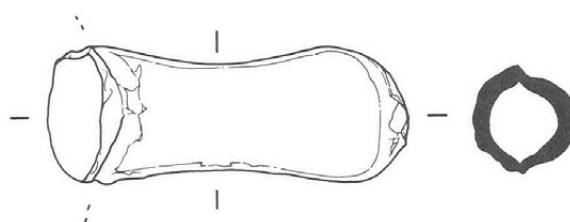
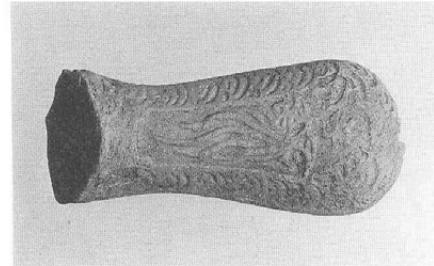
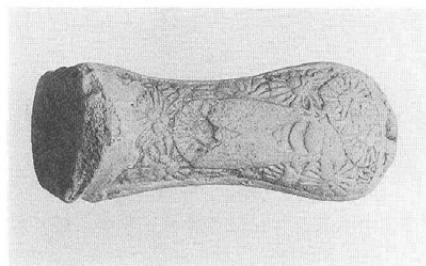




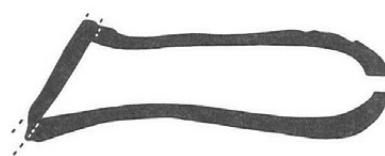
10



15



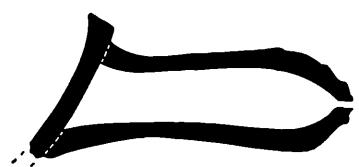
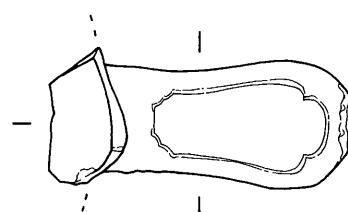
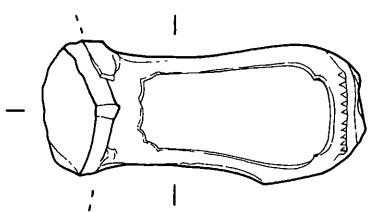
14



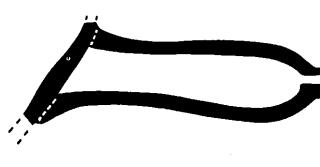
13



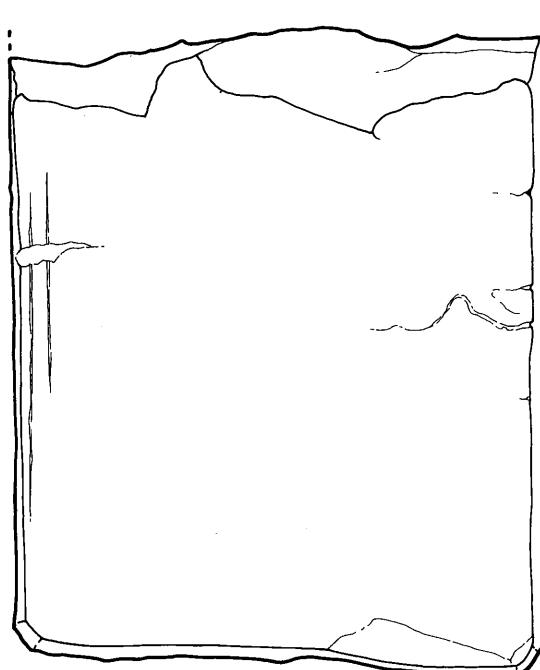
B 地点采集遗物



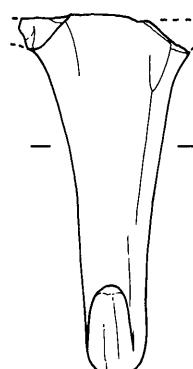
11



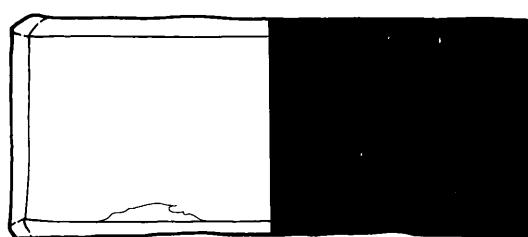
12



20



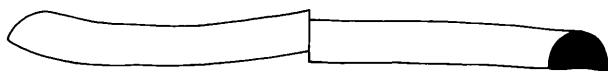
21



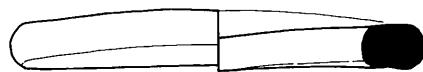
23



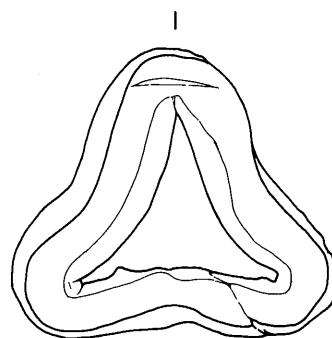
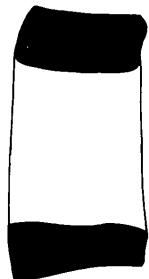
B 地点采集遗物



22



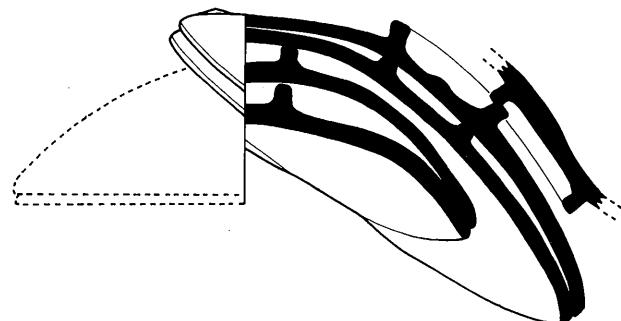
26



24



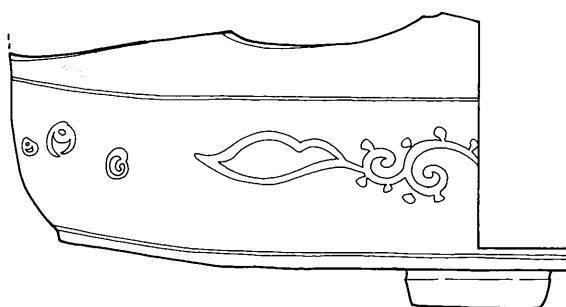
33



25



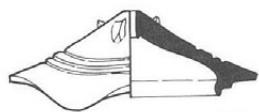
34



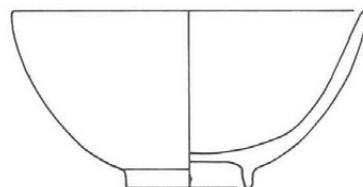
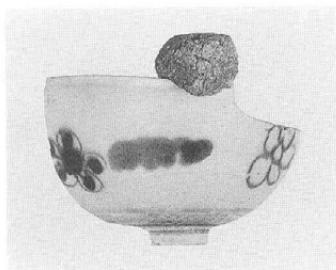
36



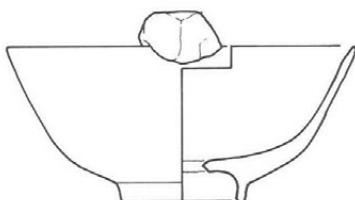
B · C · D 地点采集遗物



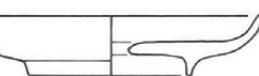
27



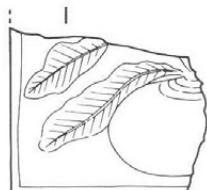
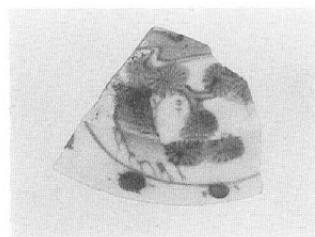
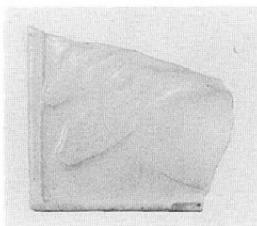
28



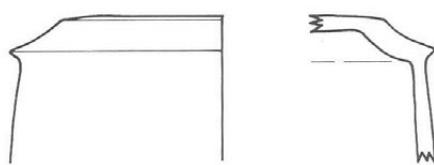
29



30



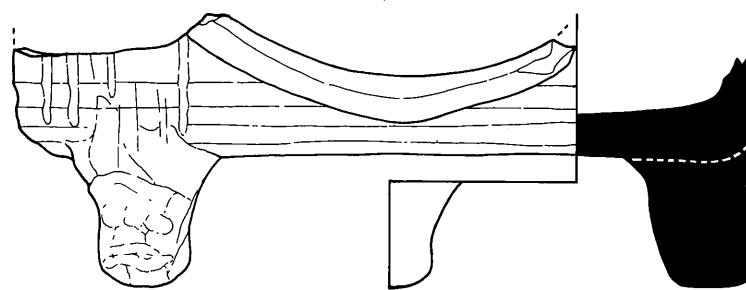
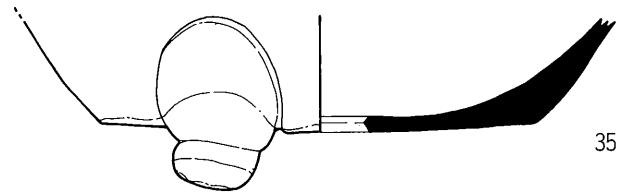
I 32



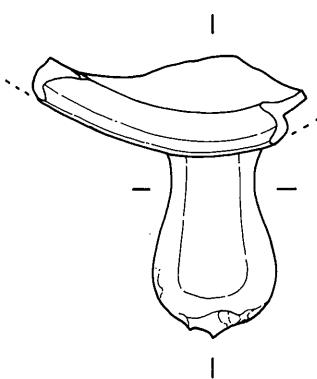
31



D 地点採集遺物



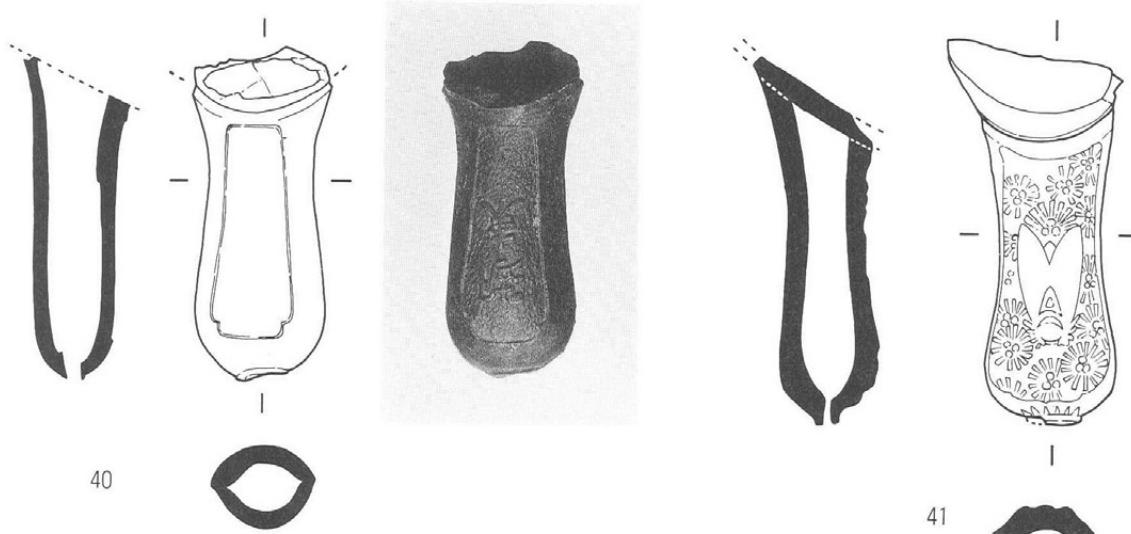
38



39

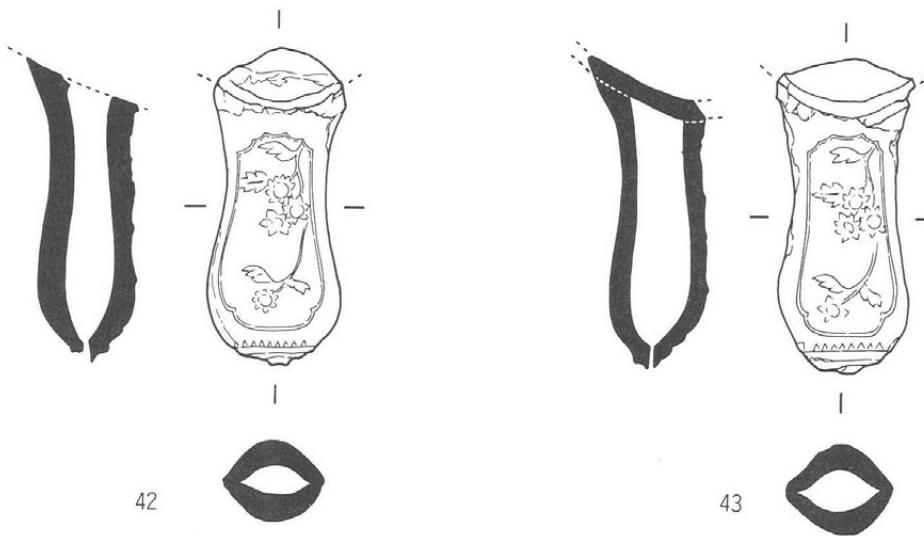


D 地点采集遗物



40

41

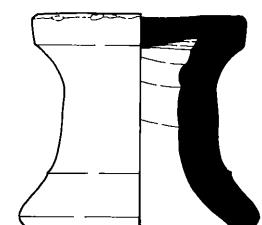
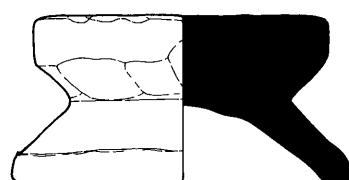
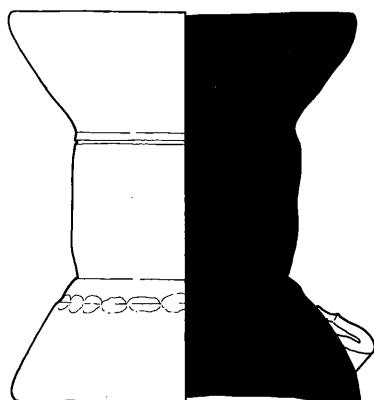


42

43

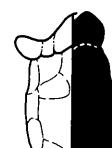


D 地点采集遗物

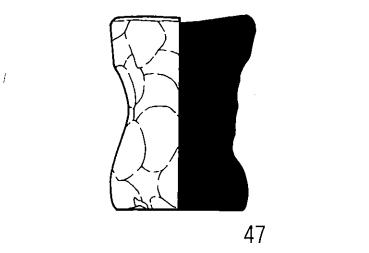


45

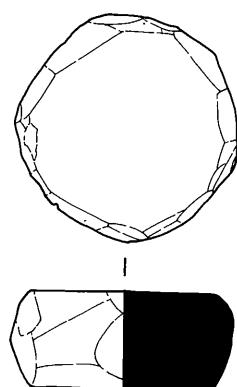
46



47

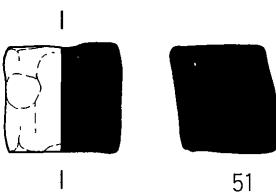


48



50

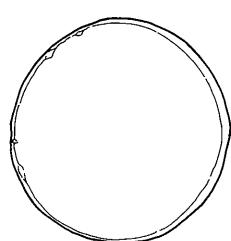
49



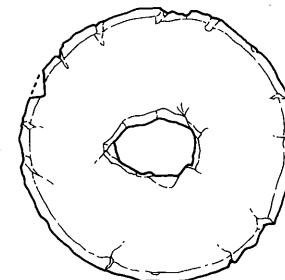
51



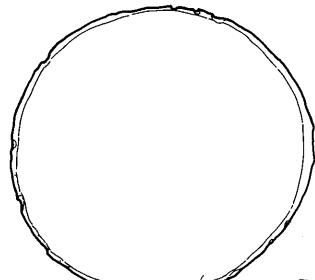
52



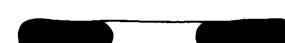
53



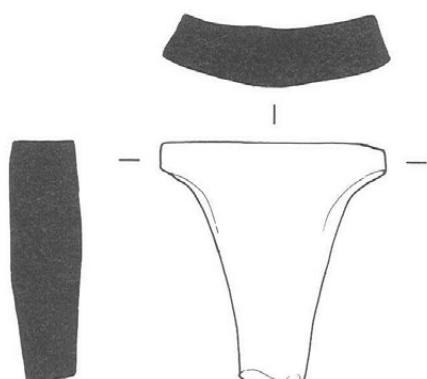
54



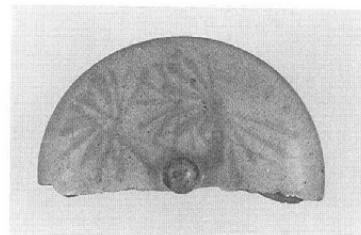
55



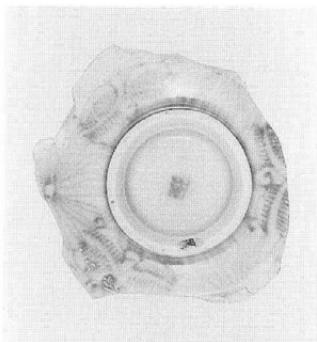
D 地点采集遗物



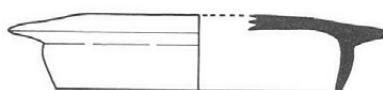
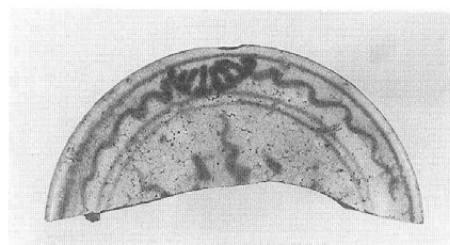
56



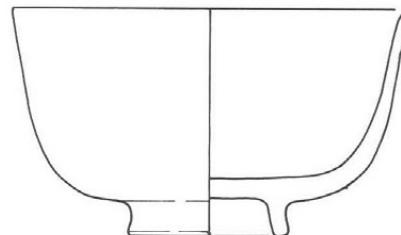
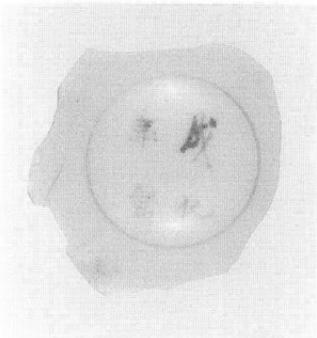
57



58



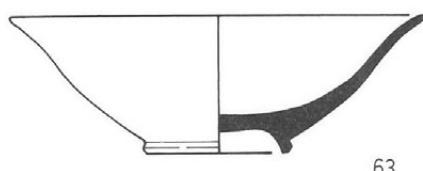
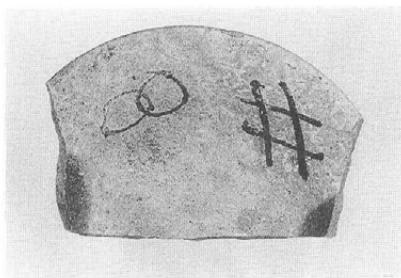
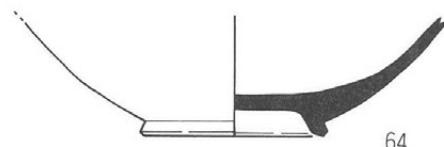
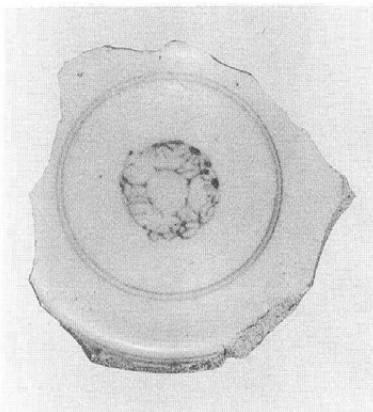
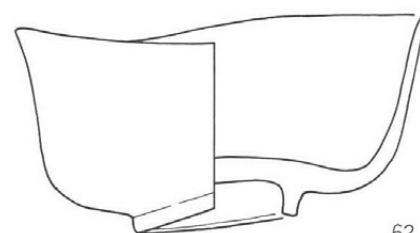
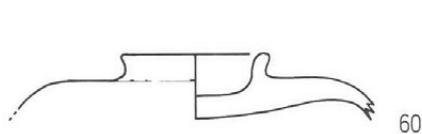
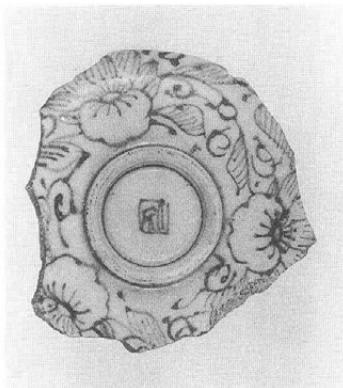
59



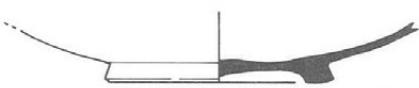
61



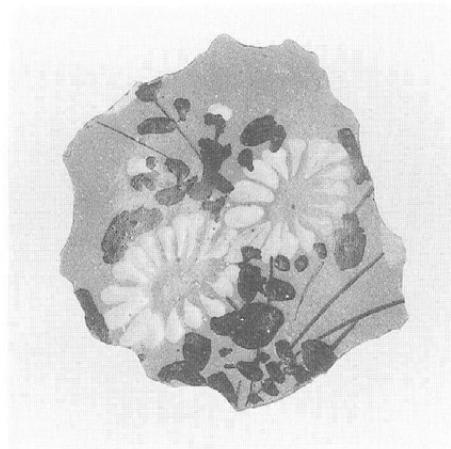
D · E 地点採集遺物



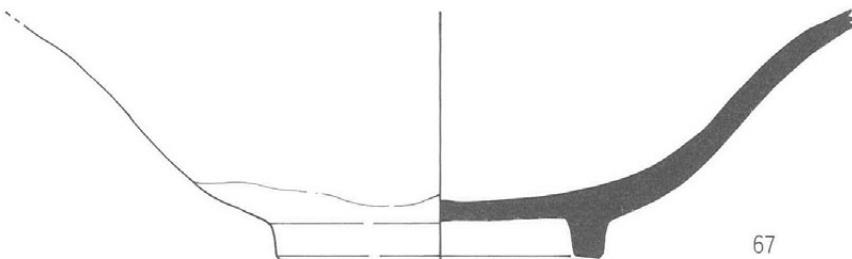
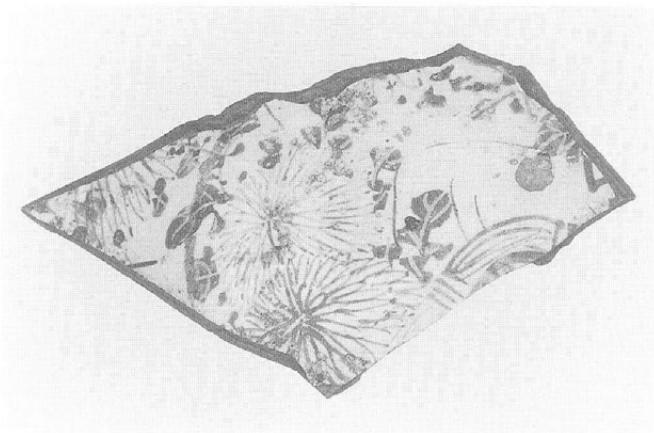
E 地点采集遺物



65



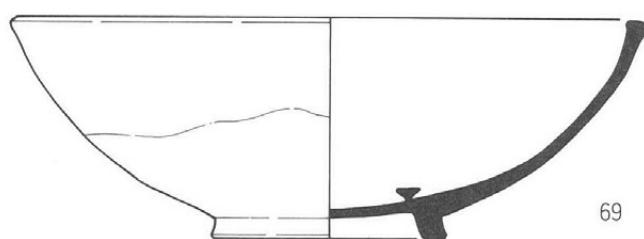
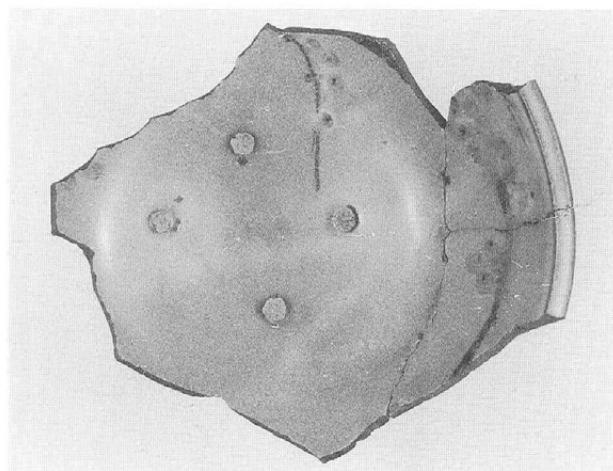
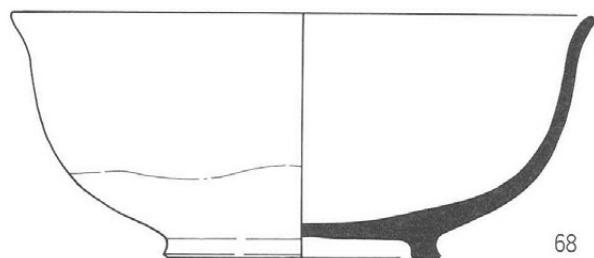
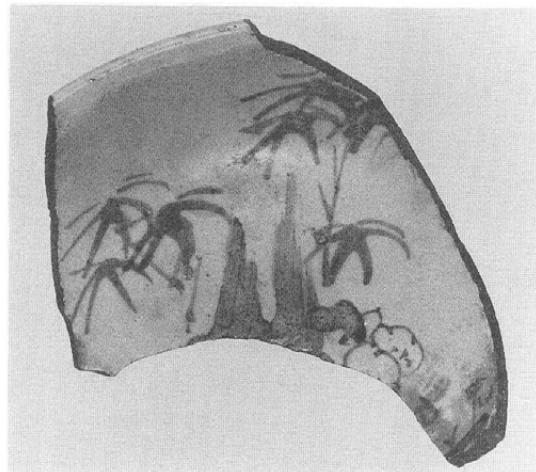
66



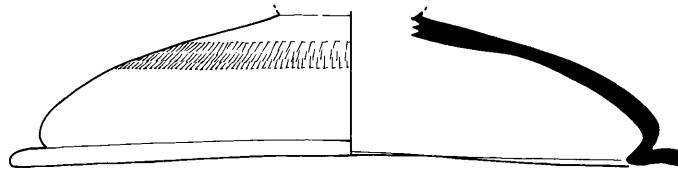
67



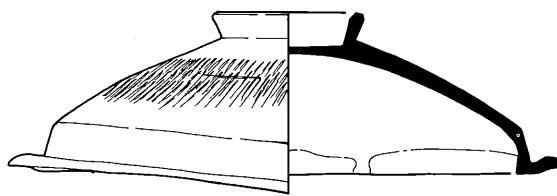
E 地点采集遗物



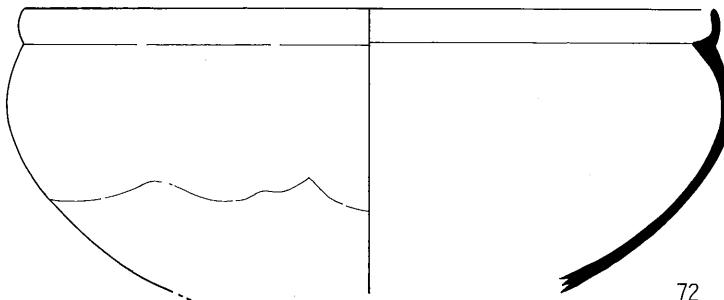
E 地点采集遗物



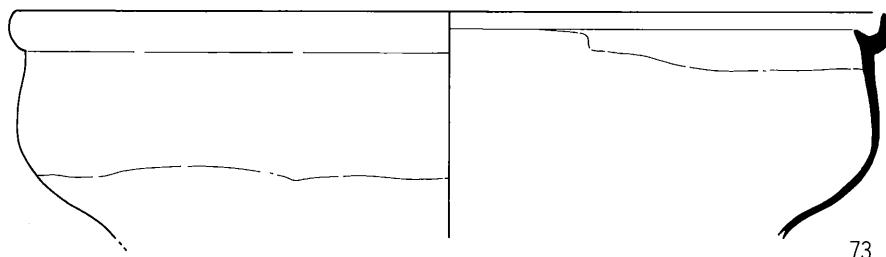
70



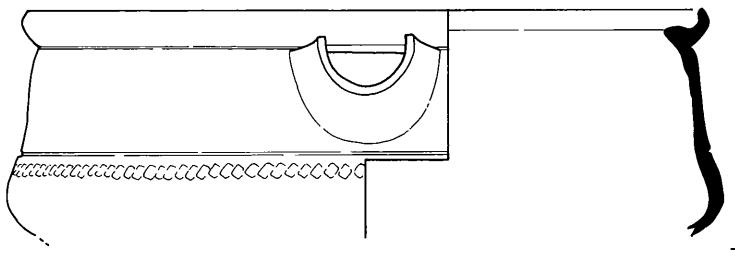
71



72



73



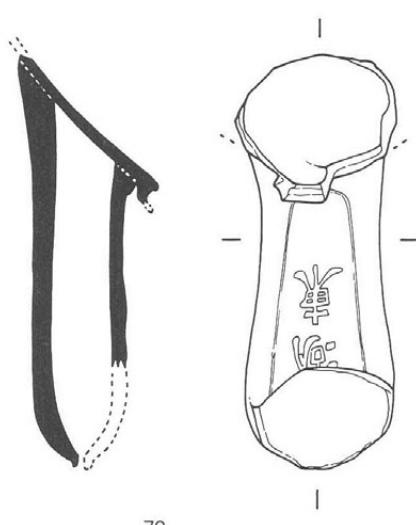
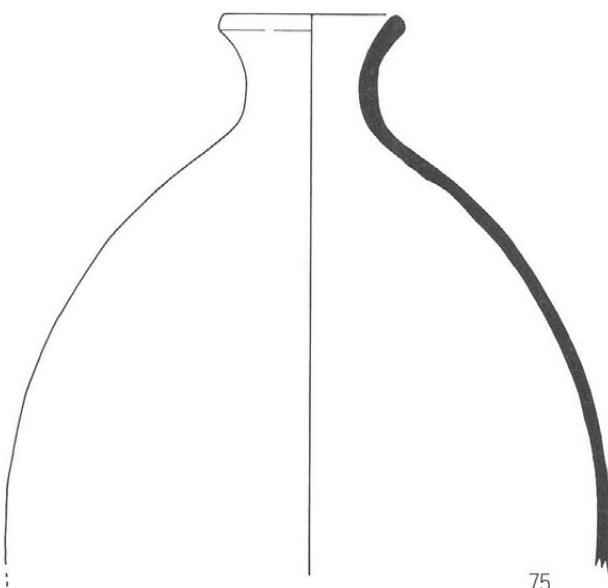
74



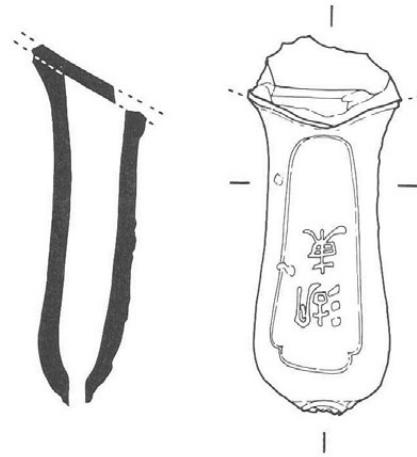
E 地点采集遗物



75



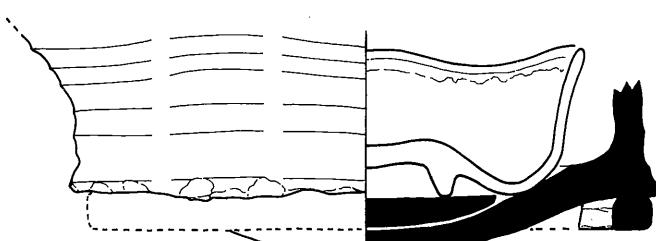
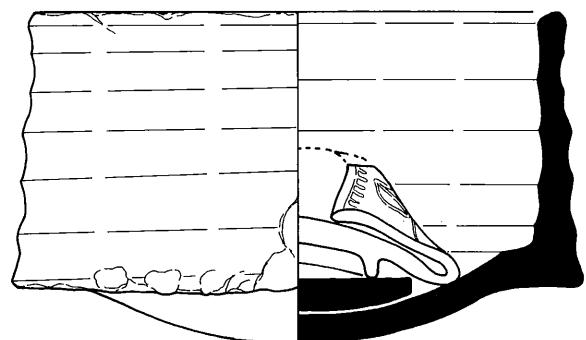
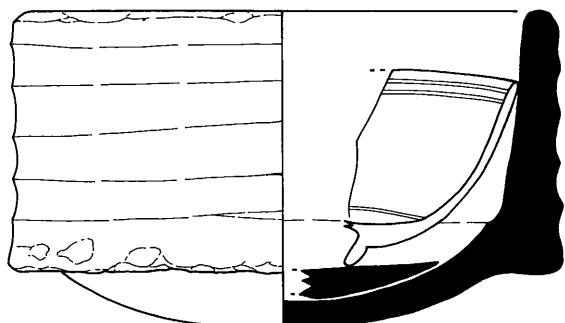
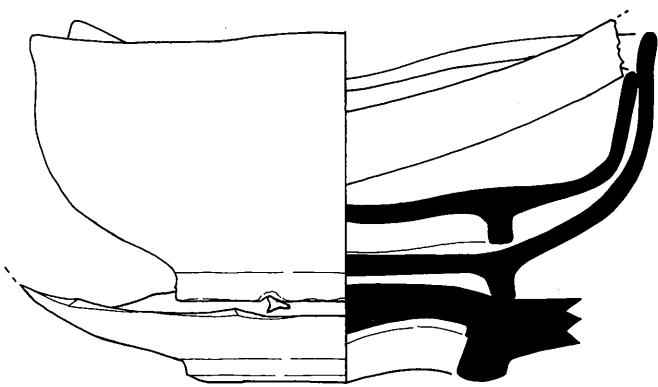
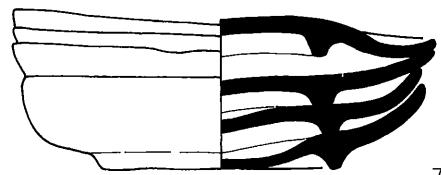
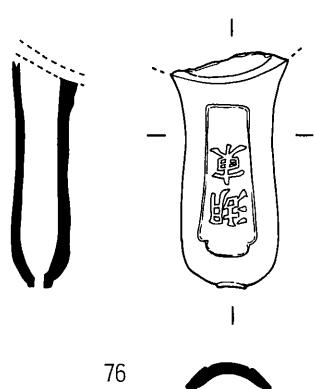
78



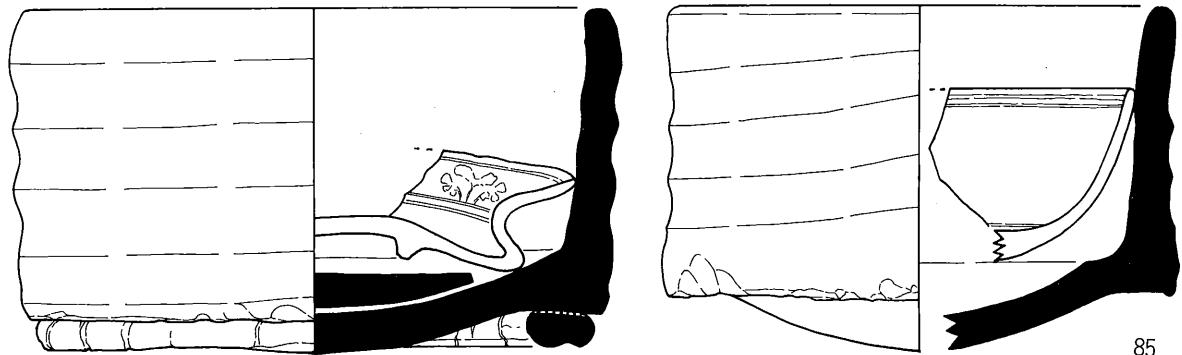
77



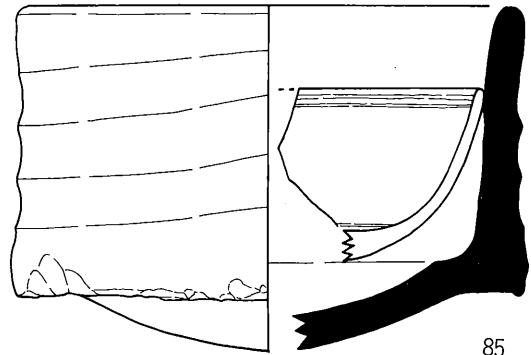
E 地点采集遗物



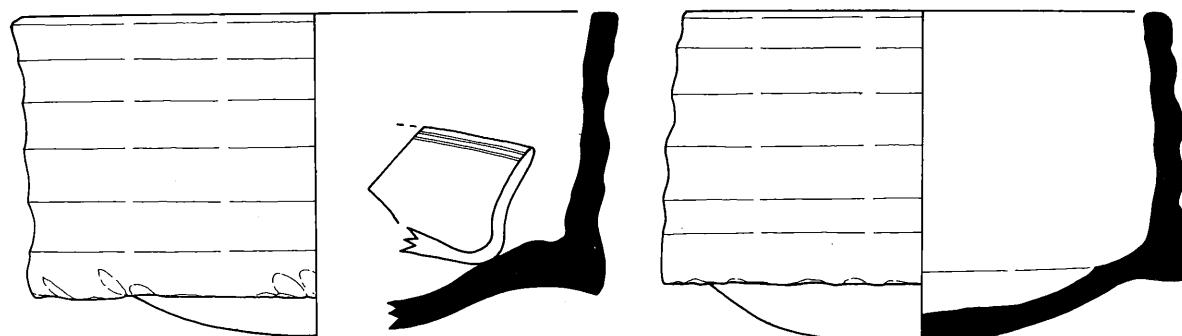
E 地点采集遗物



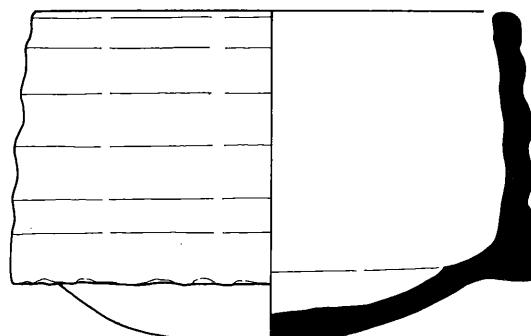
84



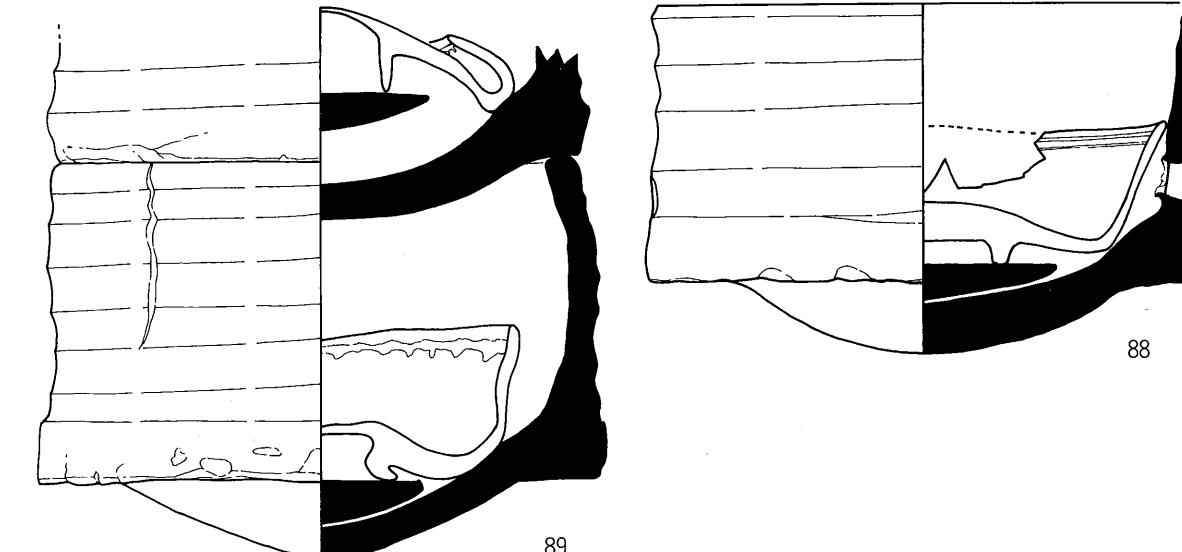
85



86



87

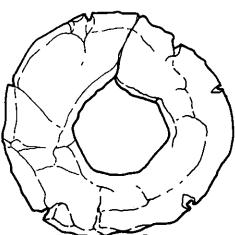


88

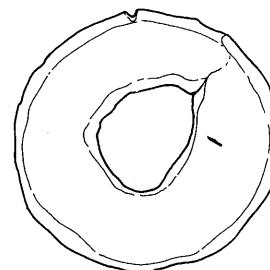
89



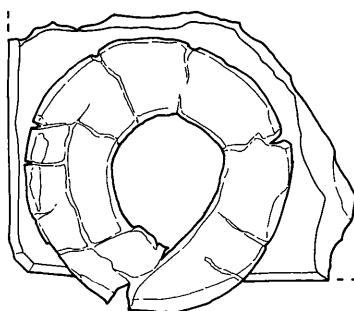
E 地点采集遺物



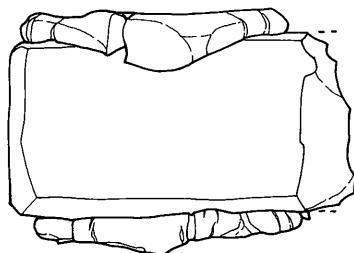
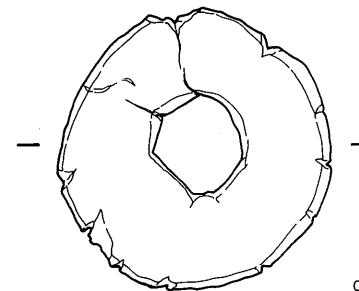
90



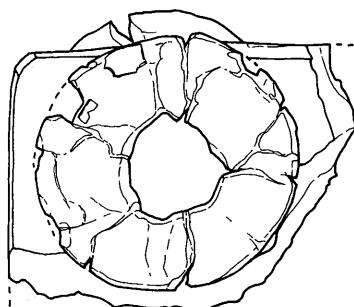
91



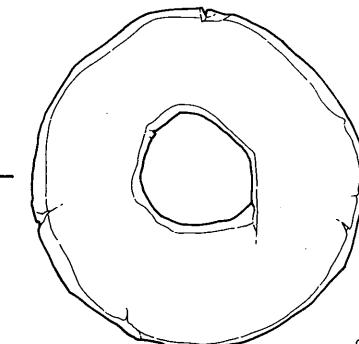
92



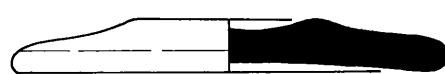
94



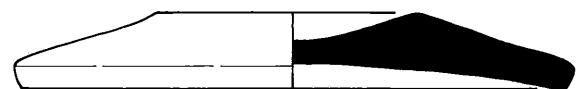
93



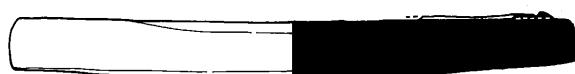
E 地点采集遗物



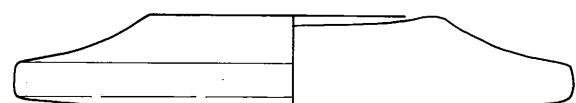
95



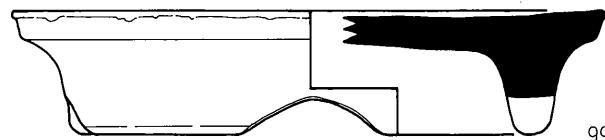
96



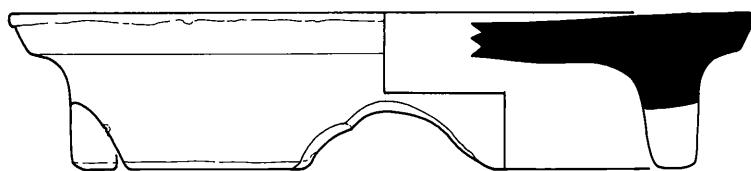
97



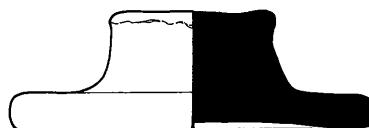
98



99



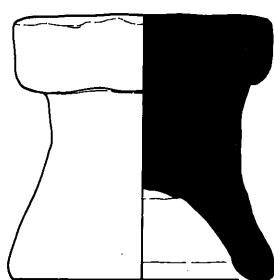
100



101

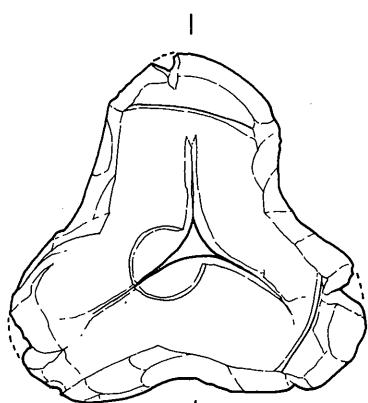


102

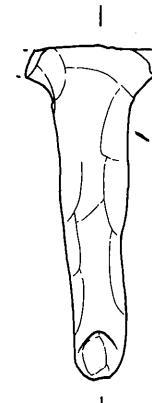


103

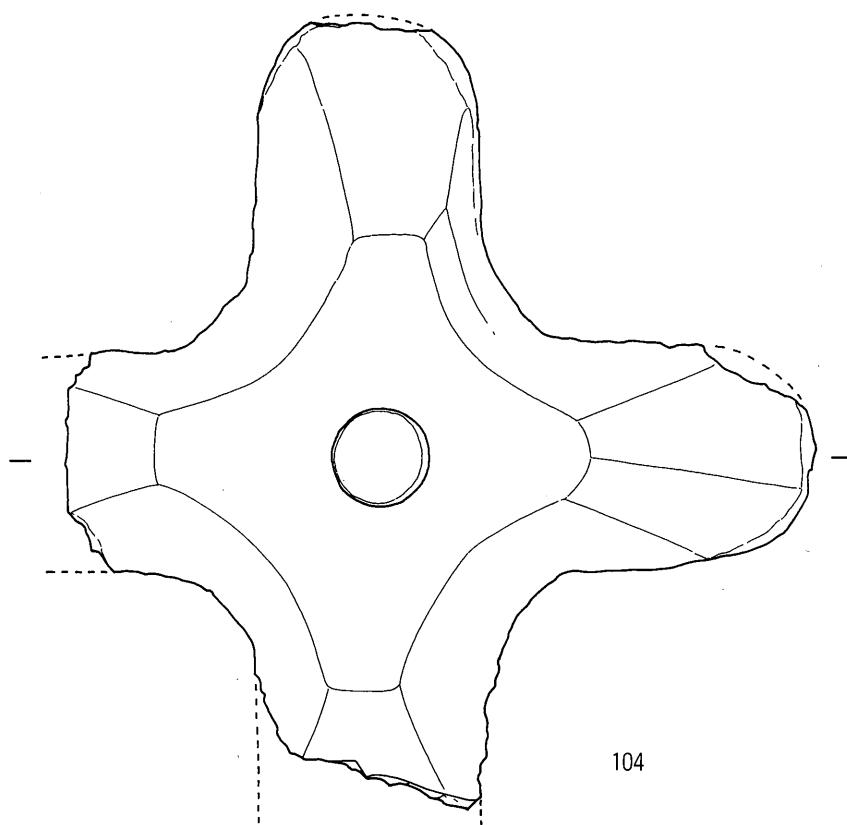




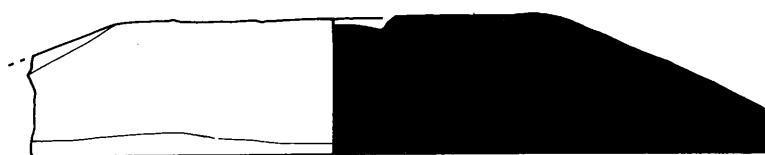
105



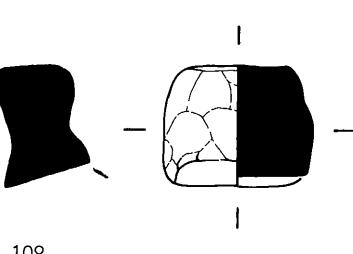
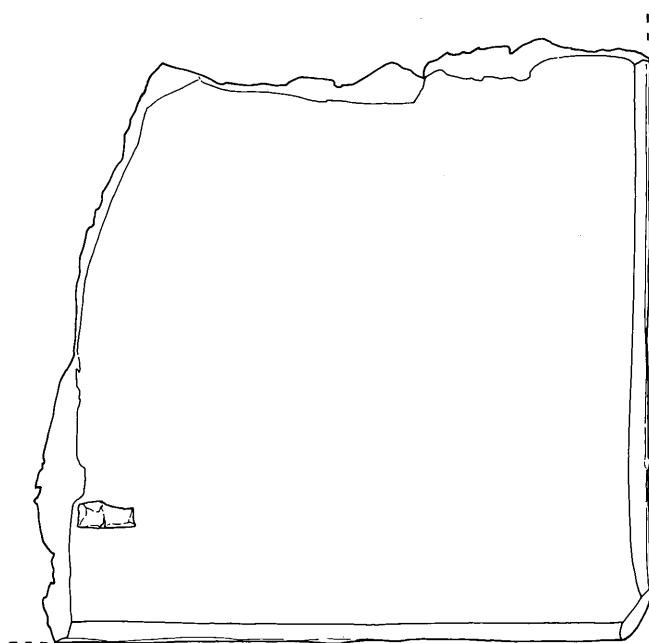
106



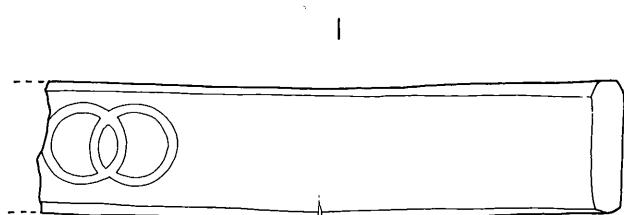
104



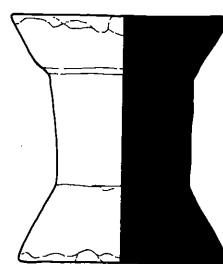
E 地点采集遗物



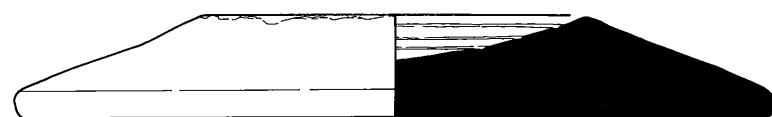
108



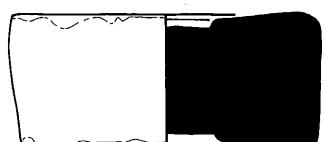
107



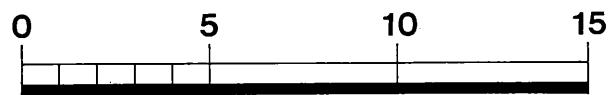
109



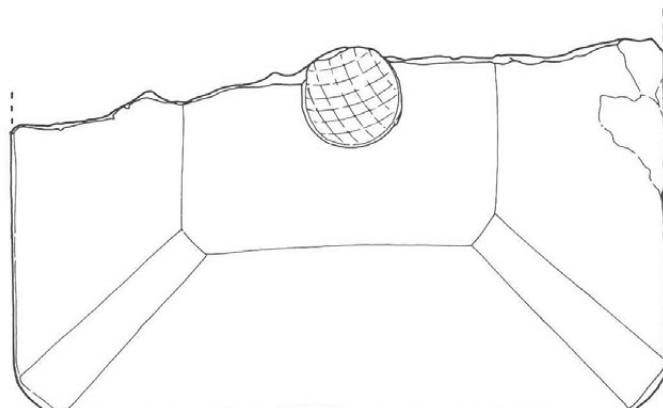
110



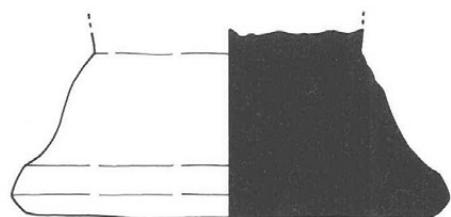
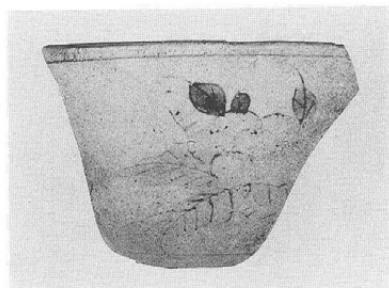
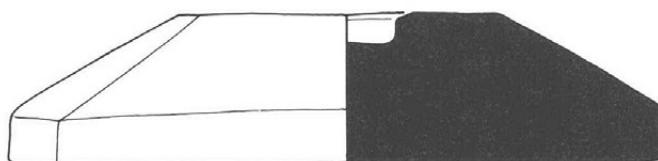
111



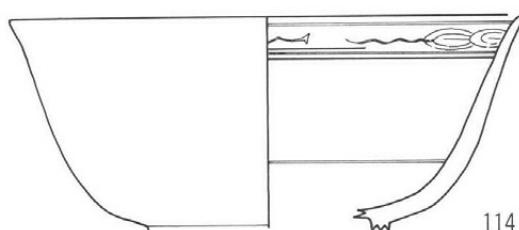
E · F · G · I 地点採集遺物



113



112



114



I · J 地点采集遗物

彦根城博物館調査報告 II
湖東焼窯跡測量調査報告書

1990.3

編集・発行 彦根城博物館
印 刷 ニホン美術印刷株式会社

